

クロスロード

11



特集1

保健・医療分野の活動ポイント

特集2

JICAボランティアの営業術



■職種別索引 掲載ページ

コミュニティ開発	4、26
行政サービス	24
防災・災害対策	4
映像	4
野菜栽培	18
青少年活動	22
環境教育	14
エアロビクス	36
PCインストラクター	16
小学校教育	20
デザイン	25
歯科衛生士	8
看護師	12、28
助産師	6
理学療法士	10、13

■国別索引 掲載ページ

インドネシア	14
ガーナ	16
キルギス	22、26
サモア	8
ジャマイカ	4
セントルシア	4
チリ	10
バヌアツ	20
ペナン	18
ボツワナ	24、25
ポリビア	36
ホンジュラス	6

■出身都道府県別索引 掲載ページ

北海道	24
山形県	36
栃木県	18
群馬県	14
埼玉県	26
千葉県	6
東京都	25
神奈川県	16
富山県	10
福井県	20
兵庫県	8
広島県	22

【凡例】

● JICAボランティアの方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2018年度1次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICAボランティア(「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」)の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

● JICAの「企画調査員(ボランティア事業)」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICAボランティアが現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶各隊員が専門性を生かし、サマーキャンプで授業を実施(ジャマイカ)
- ▶セントルシア初となる1食材に特化したレシピ本を出版(セントルシア)

特集1

保健・医療分野の活動ポイント

6

CASE 1 同僚の無理解

渡辺まどかさん(ホンジュラス・助産師・2016年度1次隊)

8

CASE 2 同僚のやる気

織田千恵さん(サモア・歯科衛生士・2016年度1次隊)

10

CASE 3 CPの不在

奥田 裕さん(チリ・理学療法士・2016年度1次隊)

12

活動Q&A集

特集2

JICAボランティアの営業術

14

CASE 1 「言葉」による営業①・プレゼン型

里見 岳さん(インドネシア・環境教育・2016年度4次隊)

16

CASE 2 「言葉」による営業②・井戸端会議型

西島百合子さん(ガーナ・PCインストラクター・2015年度4次隊)

18

CASE 3 「行動」による営業①・一点突破型

藤掛知英美さん(ペナン・野菜栽培・2015年度4次隊)

20

CASE 4 「行動」による営業②・アクティブ型

山下依里佳さん(バヌアツ・小学校教育・2016年度1次隊)

22

“失敗”から学ぶ

片山美弥さん(キルギス・青少年活動・2015年度3次隊)

24

希少職種図鑑

- ▶行政サービス 白川智久さん(ボツワナ・2016年度4次隊)
- ▶デザイン 伊藤洋美さん(ボツワナ・2014年度1次隊)

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

アフリカ専門輸入卸販売会社 社員 福田順子さん(キルギス・コミュニティ開発・2015年度2次隊)

28

OB・OG匿名座談会

看護師隊員篇

30

JICAボランティア的プチテクガイド

ミサンガのつくり方/現地の産品でクッキー/写真を楽しむ

32

INFORMATION

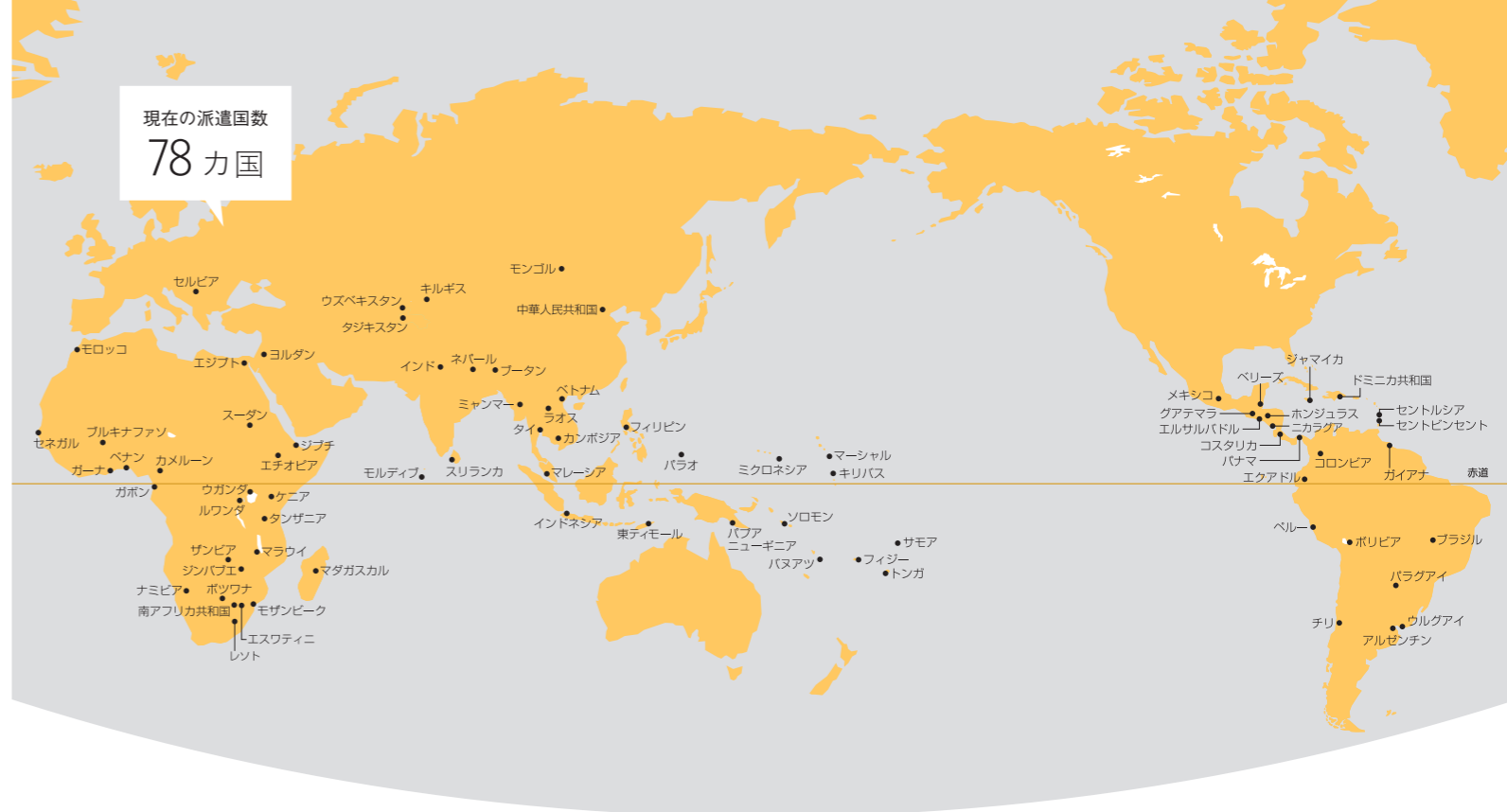
33

JICAボランティアのつづやき

お題:「餞別」

34

JICA進路相談カウンセラー/青年海外協力隊相談役の紹介



JICA ボランティア派遣現況

(2018年8月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	62	3
エスワティニ	4	1
エチオピア	43	3
ガーナ	68	3
ガボン	19	10
カメルーン	22	1
ケニア	47	4
ザンビア	73	14
ジブチ	10	
ジンバブエ	10	
スーダン	32	
セネガル	60	3
タンザニア	50	2
ナミビア	15	
ブルキナファソ	16	
ペナン	48	
ボツワナ	14	1
マダガスカル	26	
マラウイ	77	
南アフリカ共和国	8	7
モザンビーク	43	2
ルワンダ	34	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	6	
インドネシア	20	1
ウズベキスタン	17	8
カンボジア	28	15
キルギス	29	
スリランカ	65	7
タイ	32	8
タジキスタン		1
中華人民共和国	11	
ネパール	45	3
東ティモール	31	
フィリピン	37	1
ブータン	29	4
ベトナム	45	23
マレーシア	20	10
ミャンマー	6	6
モルディブ	9	
モンゴル	38	3
ラオス	43	7

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	9	
サモア	25	1
ソロモン	35	8
トンガ	16	3
バヌアツ	21	5
バブアニューギニア	27	4
バラオ	9	5
フィジー	26	4
マーシャル	8	5
ミクロネシア	10	7

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア		2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	17	3
モロッコ	16	6
ヨルダン	23	2

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		14	6	3
ウルグアイ		8		
エクアドル	44	6		
エルサルバドル	1	1		
ガイアナ		2		
グアテマラ	34	3		
コスタリカ	19	7		
コロンビア	15	15		
ジャマイカ	26	15		
セントビンセント	2			
セントルシア	10	1		
チリ	6	6		
ドミニカ共和国	41	9	4	1
ニカラグア	13	8		
パナマ	17	1		
パラグアイ	46	4	9	3
ブラジル			70	17
ペリウ	14			
ペルー	49	7		
ポリビア	41	5	2	1
ホンジュラス	32			
メキシコ		7		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,945 (835/1,110)	326 (237/89)	91 (32/59)	25 (6/19)	2,387 (1,110/1,277)
累計 (男性/女性)	44,183 (23,570/20,613)	6,395 (5,186/1,209)	1,454 (555/899)	531 (246/285)	52,563 (29,557/23,006)

JV = 青年海外協力隊
SV = シニア海外ボランティア
日系JV = 日系社会青年ボランティア
日系SV = 日系社会シニア・ボランティア(単位:人)



「身近な防災」をテーマにしたワークショップで、各生徒に自身の家の避難経路を書く方法を指導している仲村隊員

開催までの流れ	
〈5カ月前〉 企画	JICAスタッフと科学研究協会が連絡を取り合い、授業内容を企画。
〈2カ月前〉 内容決定	参加者（ワークショップに携わるJICAボランティア）と各授業内容が確定。
〈1カ月前〉 開催準備	各参加者が自身のワークショップに必要な備品・資材を準備。
〈1週間前〉 会場視察	事前に会場確認が必要な参加者のみ視察。
〈当日〉 開催	3日間にわたり、ワークショップを開催。

各隊員が専門性を活かし、 サマーキャンプで授業を実施

Jamaica

文 = なかむらひでいちろう
仲村秀一朗さん（ジャマイカ・防災・災害対策・2017年度3次隊）
ほしじま
星島ケントアレンさん（ジャマイカ・映像・2017年度3次隊）

7月31日から8月3日まで、ジャマイカの首都キングストンにある科学研究協会において、環境・防災などを含めた科学技術の体験型授業を行うサマーキャンプが開催されました。JICAボランティアの活動を報じる新聞記事を読んだ協会関係者が、JICA事務所に連絡してきたことがきっかけで、2月よりさまざまな職種の大隊員が集って計画を立て、ワークショップ（以下、WS）を行いました。

防災・災害対策隊員は「身近な防災」をテーマに、9〜12歳の25人の生徒を対象としたWSを行いました。派遣前の米軍消防士時代に、米国人の子ども向けに行った授業経験を活かし、全米防火協会のウェブサイトに掲載されている教材を用いて、各生徒に自身の家の避難経路を書いてもらい、非常口を探して色を塗るといった作業をしてもらいました。それらを通じて、生徒に防災は今すぐにでき、身近なものであると



ドローンの講習で子どもたちに操縦方法を教える星島隊員

いうことを学んでもらいました。自分の生活に近づけて考える防災教育は参加者から好評で、同席していた教育関係者から教材の入手方法について問い合わせがあるなど、今後の展開に期待です。

また、映像隊員は科学技術の体験型授業として、ドローンの活用事例の紹介と体験指導を担当しました。前半はドローンが映像の撮影だけでなく、農業や防災に利用されている現状を紹介し、今後の自動運転技術の発展で人々の生活がどう変わるのか、子どもたちと話し合いました。企画の段階で同協会が大手玩具販売店と提携し、子どもにも安全なドローンを手配してくれたので、後半では、子どもたちが実際にドローンを試運転する時間を設けました。あいうく時間が足りず、操縦できずに泣いてしまつ子もいましたが、教材に限られるジャマイカにおいて実際の操縦という体験が提供でき、より多くの子どもたちにもその楽しさを学んでもらうことができました。

これらのほかに環境教育隊員によるゴミ処理に関するWSや日本文化の紹介なども行い、「JICAボランティアに協力をお願いするのは初の試みだったが、来年以降も協働し、より良いキャンプを開催したい」という声を同協会からいただきました。次年度もジャマイカの未来を担う子どもたちに、同国が抱える防災や環境分野にかかる課題を身近に感じてもらえるよう、各JICAボランティアの専門性を活かしつつ、さまざまな方法で働きかけられればと考えています。

参加者（敬称略）= 小口夏海（環境教育・2016年度2次隊）、中込愛香（野菜栽培・2016年度3次隊）、仲村秀一朗、星島ケントアレン、2018年度1次隊の隊員8人（体育、小学校教育、青少年活動、コミュニティ開発、学芸員、防災・災害対策）

発行までの流れ	
〈5カ月前〉 市場調査	地元イベントと連携し、ブースを構え、アンケート・試食・簡易レシピ本の無料配布。
〈4カ月前〉 企画	市場調査結果を踏まえた内容を盛り込んだ、レシピ本製作・配布の提案書を作成。
〈3カ月前〉 情報収集	国内の学校・レストラン・ホテル・キャッサバ取扱業者へレシピ開発・提供を依頼。
〈2カ月前〉 編集	集めたレシピを保健省の栄養士と確認し、レシピを選抜、製本。
〈1カ月前〉 出版準備	配布先・部数の決定、消費推進ツールの作成。
〈当日〉 発行・広報	掲載レシピの試食を含む公式発表会の開催。テレビなどメディアも招待し、広報。
〈1カ月後〉 配布	消費推進ツール（ポスター、POP）と共に地元の学校・レストランなどへ配布。



キャッサバレシピ本の公式発表会の様子。掲載ページにレシピ提供者の名前や写真を入れるという約束で、協力者本人（団体）がレシピ用食材を調達してくれたので、レシピ本製作における費用は、ほぼ交通費と印刷代のみにすることができた



セントルシア初となる 1食材に特化したレシピ本を出版

Saint Lucia

文 = りきまるいくみ
力丸育未さん（短期/セントルシア・コミュニティ開発・2017年度派遣）

私はセントルシアの農林水産省マーケットイング室で、農作物の消費促進を行っていました。実は元々隣国のドミニカ国へ派遣されていたのですが、ハリケーン被害に遭い派遣国変更。本来よりも4カ月短い半年の期間での活動となりました。期間も短いので全てをやるのは難しいと判断し、私の帰国後も現地のスタッフで改良・展開できる「汎用性のある事例」を残すこと、その事例展開を任せられる「人材」を育てることを目標とし、スタートしました。

着任時「農作物の消費促進を」と農林水産省から依頼を受けたものの、配属部署は人材不足で、担当業務をこなすことに全員手一杯でした。カウンターパートもおらず、1人でゼロから始めると周りを巻き込むパワーがかりすぎると考え、既に省内で走っているプロジェクト（以下、PRJ）にテコ入れをしていくことに。そこで、比較的栽培が簡単で栄養も豊富なキャッサバの消費を推進するPRJに入り、マーケティングとプロモーションの強化案を提案、市場調査を始めました。

「キャッサバは知っているが取り扱いが不明」「レシピが少ない」といった要因から消費が伸び悩んでいることがわかり、レシピ本の製作を決定。地産品の消費志向が高いこともあり、レシピ本は「地元発」にこだわりました。レシピは、地元の学校・レストラン・業者などに開発を依頼、省のスタッフと試食・撮影して周りました。集まったレシピは保健省の栄養士と見直し、試食結果も加味しながら、より健康的で地元

食材を使用したレシピを25点選抜しました。編集・印刷も、省のスタッフにやり方を教え、無事完成。初の1食材に特化した地元レシピ本として、雑誌などのメディア・各省庁・地元企業を招待した公式発表会の開催などで大々的に発表しました。その後、国内の学校・ホテル・レストランへ消費啓蒙ツールと共に無料配布し、また地元スーパーに協力を得て一般配布。実際にレシピ本を手にした方が「今からつくってみる」とSNSに投稿している記事を目にする機会もあり、公式発表会での試食の反応と合わせて今後の可能性を感じられる結果となりました。

最初こそ「みんな全然仕事しない」とやきもきしたものの、PRJとして方向性と具体的なアクション・期限を設け、かつアクションは各メンバーにそれぞれ何らかの利益があるものを設定することで積極的に取り組んでくれました。彼らの尽力で外部のキーパーソンとも容易に繋がるなどスムーズに進み、私は実務に追われることなく人材育成に注力できました。

省としてもこれを成功事例として、今後、他の農作物でのシリーズ化、地元食材レシピサイトの開設を進めていくこととなり、スタートしています。実際に最初のシリーズ化であるマンゴーレシピ本は、育成したスタッフ为主体となり、先日無事発行までこぎつけたと連絡がありました。

今後、さらに持続・発展する活動を現地の方がやりがいを持って続けてくれることを期待しています。

保健・医療分野の活動ポイント

「JICAボランティアになるために、看護師の道を選んだ」。そんな例もあるほど、保健・医療分野のJICAボランティアが持つボランティアスピリット、あるいは「途上国の人の役に立つのだ」という意欲はひとときわ高い。それを遺憾なく発揮するためには、どのようなことに心がけたいのか。同分野のボランティアが直面する「困難」をキーワードに、答えを探ってみた。



- 1 センターに併設された「妊婦の家」の宿泊部屋
- 2 同僚による母親学級。渡辺さんの提案によって「妊婦の家」の一室が専用部屋とされるようになり、頻度もアップした
- 3 地域の高校で性教育を行う渡辺さん
- 4 農村地域に赴き、妊婦を対象に保健指導を行なう渡辺さん
- 5 CPへのプレゼンで使ったパワーポイント資料。分量は約20ページ

渡辺さん基礎情報

PROFILE

1988年生まれ、千葉県出身。大学時代に看護師、保健師、助産師の免許を取得。大病院の産科外来や病棟、新生児集中治療室で5年間勤務した後、2016年7月に協力量員としてホンジュラスに赴任。18年7月に帰国。

活動概要

ラ・パス県マルカラ市の市役所が管轄する出産施設「母子保健センター」に配属され、主に以下の活動に従事。

- 母親学級の実施・改善
- 「妊婦の家」（遠方の妊婦が出産待機をする宿泊施設）での日課としての妊婦体操の導入や保健指導
- 看護学校における周産期関連の講義
- 高校での保健教育
- 農村部における妊婦への保健指導



CASE 1

同僚の無理解

わたなべ 渡辺まどかさん
(ホンジュラス・助産師・2016年度1次隊)
の事例

プレゼン資料を使って「助産師」の業務を紹介

助産師隊員として出産施設に配属された渡辺さん。派遣国には「助産師」という職種がないなか、パワーポイント資料を準備して、自身の知識や技術に対する同僚の理解を図った。

渡辺さんが配属されたラ・パス県マルカラ市の母子保健センター（以下、センター）は、市役所が管轄する出産施設。出産が近づいた妊婦が宿泊できる施設「妊婦の家」も併設されており、渡辺さんにはその利用者を対象にした保健指導の充実化、あるいは同僚看護師への技術指導などが求められていた。センターに勤務していた医療スタッフは以下のとおり。

- 医師 研修医が7人勤務。エコーを扱えないなど、できる業務に制限があった。また、ラ・パス県の県病院から週3回、産婦人科医がセンターに来て、異常が見られる妊婦に対し、予約制でエコー診察を行っていた。
- 看護師 大学に在学中の研修生が2人勤務。
- 准看護師 2年制の看護学校で取得できる資格で、十数人が勤務。

上があった原稿を語学訓練の講師にチェックしてもらったこともできた。

助産業務の中で自己表現

CP以外の同僚たちも、やはり当初は渡辺さんのバックグラウンドについての理解はなかった。なかには「看護学生」だと勘違いし、「注射を見たことはあるの?」と聞いてくる同僚もいた。しかし彼女たちには業務があるため、時間をもらってパワーポイント資料で皆にいつせいにプレゼンするのは不可能だった。

そうしたなか、渡辺さんが自分の持つ知識や技術を同僚たちに知ってもらう手段は、彼女たちとともに助産業務を実践し、そのなかで知識や技術を見せていく、というものだった。たとえば、着任のわずか2日後のこと。出産直後に母親が痙攣を始め、生まれた子の状態も良くないという事態が発生した。そこで渡辺さんは蘇生術を主導。「子どもの体勢を変える」「酸素吸入や点滴の準備をする」など、必要な作業を同僚たちに促した。そうした場面が積み重なるにつれ、同僚たちは渡辺さんの知識や技術を理解するようになっていったのだ。

「協力隊員は、知識や技術を伝えるために派遣される者」という点については、CPが同僚たちに周知してくれた。着任の半月後、渡辺さんは同僚看護師たちを対象に情報収集のためのアンケートを実施。「医療を学んだ学

たのは、センターと保健所の両方を管理する機関のディレクター。その事務所もセンターに隣接していた。

着任2日目にプレゼンが実現

渡辺さんの着任は土曜日。その日にCPと交わしたやりとりで、彼女が協力隊員の派遣趣旨や、渡辺さんが持つ知識や技術について、ほとんど理解していないことがわかった。渡辺さんはセンターにとって初代の隊員であつたうえ、ホンジュラスには「助産師」という職種もなかったのだ。

そこで渡辺さんは、休日明けの月曜日に早速CPに時間をとってもらい、協力隊員とはどういう立場の人間なのか、自分がどのような環境の病院でどのような仕事をしてきたかなどについて、パワーポイントの資料を使いながら説明した。すると、同国では産

校の種類」「仕事に関して知りたいこと」「センターについて問題だと感じている点」などを尋ねるものだ。そのアンケートを実施するにあたり、CPが同僚たちに協力隊員の派遣目的を説明したうえで、アンケートへの協力を促してくれたのだ。

以上のようにして、渡辺さんの知識や技術、あるいは協力隊員の派遣目的が同僚たちに理解されると、「助産業務の手伝い」以外の活動を彼女たちに受け入れてもらえるようになっていった。たとえば、以下のような「業務改善」への支援だ。

- 保健指導の改善 妊婦健診に来た人や「妊婦の家」に宿泊している人を対象に開かれていた母親学級の内容や頻度を改善した。また、「妊婦の家」の宿泊者を対象にした日課として行える妊婦体操指導も開始。
- 助産ケアの指導 「体を温める」「ツボを押す」など、陣痛を促進する「助産ケア」が従来は行われていなかったことから、その指導を看護師や准看護師たちに実施した。
- 病室の改善 センターの病室は、ベッドの間に仕切りのカーテンがない相部屋。一方、入院している妊産婦は、費用の都合で病室着の頻繁な交換が叶わないことから、大半が裸で過ごしている。そうしたなか、渡辺さんは改善策として仕切りのカーテンを備えることを提

婦人科医しか扱えない「エコー」を操作できることなどを知ったことで、CPは渡辺さんが持つ知識と技術のレベルを理解。「協力隊員は、配属先の業務を手伝うだけでなく、知識や技術を伝えるために派遣される者」という渡辺さんの主張も納得してもらった。このパワーポイント資料は、現地語学訓練の最中に作成していたものだった。作成のきっかけは、語学訓練の講師から受けたこんな質問だ。「あなたの職業である『助産師』は、この国に存在しない。どのような仕事をやるものなの?」。これを聞いた渡辺さんは、「助産師」として働いてきた者にどのような知識や技術があるのか、「配属先の同僚もわからないかも」しれない」と予測。そうして、着任後に同僚に見せる目的で作成したのが、このパワーポイント資料だった。出来

案し、実現してもらったことができた。

こうしたセンターの業務改善に加え、やがて渡辺さんは配属外での活動にも手を広げるようになった。たとえば、保健指導が行われていなかった農村地域の保健所に赴き、周辺の妊婦を対象にした保健指導を行うことなどだ。そうした活動に取り組みきっかけを与えてくれたのは、配属先の同僚たちだった。渡辺さんの知識や技術への理解を持った彼女たちが、折に触れて外部の医療関係者に渡辺さんの存在を喧伝。その結果、彼らから保健指導のリクエストが舞い込むようになったのだ。

事前準備でチャンスをものに

「活動依頼が舞い込む」など、活動に弾みをつけるチャンスは突然訪れることも少なくないはず。それを予測し、事前に準備を進めておけば、チャンスが無駄にせず済む。渡辺さんが現地語学訓練の最中にプレゼン資料を作成した件も、その典型的な例だ。

渡辺さんの事例のポイント

- ① 織田さんが立ち上げたモデル小学校での継続的な歯科保健指導で歯磨き指導を行う同僚の歯科衛生士
- ② 配属先で外来患者の診療を行うデンタルセラピストと、その介助を行う歯科助手
- ③ 配属先における診療器具の消毒。この業務を担う歯科助手たちに織田さんは改善の指導も行った
- ④ 同僚のデンタルセラピストが企画・実施した小学校での歯科保健指導を手伝う織田さん（右端）



CASE 2

同僚のやる気

おりたちえ
織田千恵さん
(サモア・歯科衛生士・2016年度1次隊)
の事例

善意の「手伝い過ぎ」が同僚の勤務態度の悪化を誘発

病院の歯科部門で技術指導に携わった織田さん。当初、多忙に見えた歯科助手の業務を積極的に肩代わりしたところ、それがかえって彼らの「さぼり癖」を誘発することとなってしまった。

織田さんが歯科衛生士隊員として派遣されたサモア国立病院は、首都アピアにある国内最大の病院。配属先である歯科部は着任当時、以下のようなスタッフ構成となっていた。

- 歯科医師 8人
- 歯科衛生士 1人
- デンタルセラピスト 約30人
- 歯科技工士 3人
- 歯科助手 4人

デンタルセラピスト以外の職種が担当していたのは、日本の業務内容と同様。たとえば歯科衛生士の場合、むし歯や歯周病を予防するためにフッ素を塗ったり歯石を除去したりする「歯科予防処置」、歯科医師の業務をサポートする「歯科診療補助」、歯磨き指導などの「歯科保健指導」という3つが担当業務だ。一方、「デンタルセラピスト」は日本にない職種。歯科医師が行う抜歯などが認められている一方、歯科衛生士が行う歯石除去な

どもも担当するという、両者の中間にある職種だった。これらの職種のうち、フィジーなど歯科の水準がより高い他国で教育を受けているのは歯科医師のみ。そのため、ほかの職種のスタッフには知識や技術の面で不足している点があった。織田さんに期待されたのは、そうした課題の解決に向けた技術支援だった。

同僚が怠けるように

織田さんは着任早々から、歯科衛生士が足りないためにこれまで配属先でほとんどなされていなかった歯周病患者の歯石除去を、一歯科衛生士として担当することから活動をスタート。しかしまもなく、ある失敗を経験する。「手伝いすぎ」という失敗だ。

歯科部を訪れる外来患者は、一日におよそ100人にのぼった。目についたのは、治療器具の消毒・準備などける余地』をつくってしまったのではないかと考えたのだった。

この方針転換は正解だった。以前からいる歯科助手たちは、当初、織田さんがなぜ急に診療室に姿を見せないようになったか、不思議そうにしていた。しかし、ほどなく「自分たちがやらねば」と我に帰り、新人3人に業務を教えながら、診療介助の業務にふたたび懸命に取り組むようになったのだ。さらにしばらくすると、彼らは新人たちと話し合いながら、織田さんが行っていたやり方を参考に、患者への診療介助や診療器具の管理に工夫を凝らしたりもするようになった。

新規プロジェクトを開始

歯科助手たちの業務のサポートから手を引くことができた織田さんは、地域における「歯科保健指導」の底上げに注力。以下のようなプログラムを、まずはモデル校に選んだ小学校で開始した。任期の残りが約10カ月となった時期である。

- 歯科医師1人、デンタルセラピスト1人、歯科衛生士2人という体制により、モデル校で継続的な歯科の健診と保健指導を行う。
- 実施は3カ月に1度（年間4回）。そのほか、教員の協力で「フッ素によるうがい」を週に1回のペースで実践してもらう。
- 永久歯の生え方の違いにより、小学

生のうちは学年ごとに歯磨きの重点は異なる。そこで、「1年目は1年生」「2年目は2年生」というように、毎年指導対象を1学年ずつ上げていきながら、6年をかけて小学校の全6学年で試行する。

このプログラムには、配属先で特に「予防」への意識が高かったデンタルセラピストが主導を買って出してくれた。また、当初は通常業務で多忙だとの理由で関与を渋っていた歯科衛生士も、プログラムがスタートすると、織田さんのサモア語の拙さを見かねて、積極的な姿勢を見せてくれるようになった。そうして、織田さんの帰国した現在も継続されるに至ったのだった。

「がんばり過ぎ」が時にあだに

配属先の通常業務をフォローすれば、配属先の実態が見えたり、同僚との関係が深まったりする。しかし「手伝いすぎ」は、往々にして同僚たちの「怠け」を誘発するおそれがある。そのため、様子を見ながら、手伝いの適切な加減を見極めることも重要だ。

織田さんの事例のポイント

- ① ウアラニエ市内のレストランの従業員を対象に、障害予防を目的とした体操の指導を行う奥田さん
- ② 市役所に来ることができない患者の自宅を訪ね、家族に歩行介助の指導を行う奥田さん
- ③ 「実質的なCP」となったAさん(左)とともに、地域のマラソン大会で出場者にストレッチの指導をする奥田さん
- ④ JICAチリ事務所における活動報告会には、Aさん(右端)を含む「実質的なCP」3人を招待。写真の女性2人はいずれも市役所の職員。理学療法士ではなかったが、活動先を紹介するなど、奥田さんの活動をフォローしてくれた

奥田さん基礎情報

PROFILE

1976年生まれ、富山県出身。川崎医療福祉大学卒、埼玉県立大学大学院修士課程修了。理学療法士として回復期病院と訪問看護ステーションに勤務した後、理学療法士を養成する専門学校の教員に。2016年4月、協力隊員としてチリに赴任(現職参加)。18年3月に帰国し、翌月復職。

活動概要

ウアラニエ市役所(クリコ県)の社会開発部高齢者課に配属され、主に以下の活動に従事

- 住民に対する理学療法の実施
- 高齢者集会での健康増進に向けた体操指導
- 市役所職員や地域企業の従業員に対する障害予防に向けた体操指導
- 小学校の障害児学級の生徒に対する理学療法の実施



CASE 3

CPの不在

おくた ゆたか
奥田 裕さん
(チリ・理学療法士・2016年度1次隊)
の事例

技術を伝えることができる人材を
配属部署外で確保

市役所に配属され、高齢者の健康増進支援や理学療法サービスの提供に従事した奥田さん。配属部署に理学療法の専門性を持つ人がいないなか、それを持つ「実質的なカウンターパート」を外部に求め、技術の伝達を図った。

奥田さんの配属先は、クリコ県ウアラニエ市の市役所。高齢者福祉に関する事業を所管する社会開発部高齢者課が所属部署だ。社会の高齢化が進みつつあるなか、高齢者を中心とする住民の健康増進や障害予防を理学療法士の立場で支援するというのが、求められていた役目だった。

着任当初から悩みの種だったのは、配属部署に理学療法の専門性を持つ職員がいないことだ。同国には「理学療法士」の国家資格自体は存在し、奥田さんの着任当時、市役所も2人を雇用していた。しかし、所属はそれぞれ「健康部」というよその部署。カウンターパート(CP)として紹介された社会開発部高齢者課の職員は社会福祉士で、医療分野の職種ですらなく、理学療法の技術を伝える相手とするのは不可能だった。

① 公立小学校1校と公立高校1校にそれぞれ1人ずつ配置されていたウアラニエ市健康部所属の理学療法士による施術(在校生が対象)
② 1カ所の小規模診療所に配置されていた同市健康部所属の理学療法士(1人)による施術
③ 市内唯一の公立病院に配置されていた理学療法士(2、3人)による施術
④ 民間の理学療法士による施術(個人で請け負っており、人数は不明)

奥田さんが①〜④のいずれのタイプの理学療法士とも面識があったが、白羽の矢を立てたのは、①のうち、小学校に配置されていた男性の理学療法士(以下、Aさん)である。彼の配属校での立場は「保健室の先生」。すべての在校生の医療面のケアを担当していた。その業務の一環として行っていたのが、特別支援学級に在籍する身体障害児への理学療法だった。奥田さんがAさんと知り合ったのは、着任後まもない時期。社会開発部長の紹介だった。それから毎週一回、奥田さんがAさんの学校を訪れ、在籍する障害児を対象とした理学療法を手伝うようになっていった。

そうした継続的なかかわりがあったにもかかわらず、奥田さんは「配属部署外の人」であることにこだわらないうち、Aさんを「実質的なCP」にしようという発想が持てずにいた。しかし、前述の先輩隊員の言葉をきっかけに、あらためて「実質的なCP」

ストにもとづいて、奥田さんが着任早々に着手した活動は次の2つだ。いずれもCPなしに実施が可能なものである。

■ 住民への理学療法
当初は、与えられた専用の施術室を使い、来室する患者を対象に実施していった。料金は無料で、週に3人ほどというペース。やがて、市内には覆たきり来室できない患者も多いことがわかってきたので、患者宅での理学療法や家族への介助の指導なども、週に10回程行うようになった。

■ 高齢者への体操指導
地域で行われる高齢者の集會に赴き、健康増進を目的とした体操の指導を行った。

「実質的なCP」を確保
自身の治療によって回復していくと捉え直し、技術を伝えることにも力を入れることにしたのだった。

在外研修が足りたに
チリの理学療法士は大学で6年間学んでいるため、「知識」は豊富で、かつプライドも高い。しかし「技術」には課題が見られた。実際の施術は機器を使った電気刺激療法をメインとしているため、直接患者の体に触れて機能回復を図る徒手的な治療法については、熟練しにくい状況にあった。この点はAさんも同様だった。奥田さんが脚を怪我した際、徒手的な治療を施してもらったところ、患者に痛みを感じさせてしまうような技術レベルだったのだ。

しかし、Aさんへの技術指導は当初、容易ではなかった。Aさんは奥田さんと同年代で、理学療法士としてのキャリアは10年強。そのため、プライドもひととき高く、それを傷つけないよう配慮した伝え方をしても、奥田さんのアドバイスは聞き流されてしまっていた。しかし、週に一度の定期的な協働を重ねたことで、やがてAさんの頑なな態度も軟化。そうした流れを後押しする決定的なステップとなったのは、エクアドルで開かれたリハビリ分野の在外研修に、「CP」としてAさんに同行してもらったことだ。

研修では、「普段の臨床の中で抱えている問題を整理する」という事前

患者を見れば、やりがいを感じることはできた。しかし、「現地の人に理学療法の技術を伝える活動にも取り組みたい」という思いは強かった。奥田さんは着任して半年ほど経った時期、そんな悩みについてチリの先輩隊員に相談してみた。すると、こんな答えが返ってきた。「自分も最初は同じ状態だった。しかし、活動ごとに配属先外で協働してもらえる人を見つけ、その人たちを『実質的なCP』だと捉えて活動を進めるようにしてみたことで、技術の伝達なども実現できるようになった」。この言葉に背中を押され、奥田さんは配属部署外に「実質的なCP」と言える人をつくらうと考えるようになった。

当時、ウアラニエ市内で理学療法が受けられる機会には、奥田さんが担う社会開発部の無料サービスのほかに、次のようなものがあった。

課題が与えられていた。その課題を果たすという名目があったことから、角が立たない形でAさんとあらためて理学療法に関して意見交換することが実現。さらに研修後には、研修で講師が話したことを「後ろ盾」にできるようになったため、Aさんへのアドバイスがしやすくなったのだった。この研修の後、学んだことをウアラニエ市の医療従事者に伝える「還元研修」を、奥田さんはAさんと共に実施する機会もあった。それにより、Aさんは奥田さんの「実質的なCP」としてその役目を引き継ぎ、同市の理学療法のレベルアップを先導する人材へとなっていく可能性も出てきたのだった。

「実質的なCP」を見つける

リハビリ分野のJICAボランティアの場合、派遣国には専門性を持った人材がまだ少なく、配属部署の同僚はいずれも専門性が異なる人ばかりということもある。そうしたケースでは、技術を伝えることができる人材を配属部署外で確保することで、活動が広がる可能性も出てくる。

奥田さんの
事例のポイント

Question +2

新生児発育指標の 早見表を作成する 際の留意点は？

産科病院で活動した
理学療法士隊員より

活動先の産科病院では早産児や低出生体重児が多いです。しかし、退院後の発育は地域のクリニックが担当することになっているため、配属先の医療従事者は、新生児が退院後にどのような発育をたどるのかを、お母さんに詳しく伝えません。そこで私は、出生後1カ月から1歳までの発育の指標（3〜4カ月、5〜6カ月、7〜8カ月、9〜11カ月）をまとめた早見表を作成し、配属先の新生児集中治療室に掲示することで、入院中からお母さんたちに退院後の発育について知っていただきたいと考えています。こうした早見表の作成にあたり、技術的に留意すべき事項について教えていただきたいです。

Answer +2



【回答した技術顧問】
もり よしえ
森 淑江さん
●青年海外協力隊技術顧問
(担当分野: 看護)
●群馬大学教授

新生児の発育指標の早見表の作成にあたって留意していただきたい点は以下のとおりです。

- ① 標準の発育指標で作成するだけでなく、早産児や低出生体重児の両親が、たとえば「出生後3〜4カ月経つのに首が座らない」などと驚いてしまいますし、「あれもこれもほかの児より遅れている」と考え、悩むこととなります。それがときに虐待につながりかねませんので、十分な注意が必要です。早産児や低出生体重児は、正常に出生した児に比べて発育にはるかに時間がかかりますので、その説明をまず行い、単純に比較しないよう指導してください。
- ② 標準の発育指標をどのように補正して考えるかですが、一口に早産児・低出生体重児と言いつても、出生時の週数やその他の要因により発達の予後

やスピードは変わってくるので、一般的には、修正週数で標準の発育指標を目安としながら、個別の評価をします。例えば、出生から数えれば月齢7カ月だが、修正月齢は4〜5カ月という早産児であれば、正常産児の4〜5カ月相当の発育をしているかを見ることが大切です。

日本では、ハイリスク児フォローアップ研究会のフォローアップ健診プロトコルというものがあり、極低出生体重児（出生体重1500グラム未満）については、1歳6カ月健診までは修正月齢で見ても、3歳健診からは暦年齢で見ることになっています。詳細は同研究会の以下のウェブサイトをご覧ください。
<http://highrisk-followup.jp/schedule/>

ボランティア技術顧問が回答 活動Q&A集

JICAボランティアへの技術支援を目的に、分野ごとに配置されているボランティア技術顧問。派遣中ボランティアから寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

Question +1

「モリンガ」を活用した栄養改善活動の優良事例は？

病院配属の看護師隊員より

栄養失調症の乳幼児やその母親、その他の住民の栄養改善を目的に、以下のようなモリンガの普及活動を行っています。

- 配属先病院の敷地でモリンガを栽培し、採れたモリンガを病院食に混ぜ込んだり、入院中の乳幼児の母親で栄養失調症の方に食べていただいたりする。
- 地方の村やヘルスポストなどでモリンガの植樹を行う。

そこで、これまで隊員がどのような方法でモリンガの普及活動を行ってきたのか、それによりどのようなインパクトを与えられたのかを教えてください。

Answer +1



【回答者】
かみ しげる
神谷 茂さん
●青年海外協力隊技術顧問
(担当分野: 医療)
●杏林大学保健学部長

モリンガはアジアやアフリカなどの熱帯地域・亜熱帯地域に群生する植物で、カリウムやカルシウム、ビタミン(A、B1、B2、B3、E)、アミノ酸が豊富に含まれていることが知られています。また、医学的にも抗炎症作用や抗菌作用、抗糖尿病作用、抗ガン作用などを持つことが報告されています。そのため、モリンガを用いた栄養改善活動を展開しようとする企画は適切であると考えます。そうした活動の一例として、アフリカの農村に派遣されたエイズ対策隊員が、任地が同じ栄養士隊員と協力して行った、住民のHIV感染予防を目的とした栄養改善活動についてご紹介します。

2人が行ったのは、5日間にわたるモリンガに関するワークショップでした。同ワークショップでは、「肥料のつくり方」「殺虫剤のつくり方」など栽培方法に関する話、栄養に関する話、調理方法に関する話や実際の調理・試食、コミュニケーション菜園や家庭菜園の活性化などが行われました。

住民には大変評判が良く、加えてHIV感染の予防啓発も十分行うことができたとのことでした。職種が異なる隊員たちのコラボレーションが実効的であった例でもあります。

！モリンガは、子宮収縮や流産の可能性が指摘されており、妊婦の摂取は危険なのでやめましょう。

JICAボランティアの営業術

JICAボランティアの最初の関門は、ボランティア自身の性格やスキル、赴任の目的などを現地の人たちに伝え、自分に対する興味を持ってもらうこと。ボランティア活動には、彼らの理解と協力が不可欠だからだ。「営業活動」とも呼ぶべきそうした最初の一步には、どのようなやり方があるだろうか。本特集では、それぞれ異なるタイプの「営業術」で活動の広がりを実現させた事例を紹介する。

CASE_1



「言葉」による営業①・プレゼン型」
里見岳さん(インドネシア・環境教育・2016年度4次隊)の事例

「プレゼン」による具体的な自己発信で活動対象校の教員の理解・協力を獲得

学校で環境教育授業に取り組みことになった里見さん。活動先の学校の教員から自身の活動への理解と協力を得るための手段となったのは、提供可能なコンテンツを「見える化」したプレゼンテーションだった。

インドネシア南スラウェシ州の州都・マカッサル市の環境管理事務所に配属された里見さん。求められていた活動は、同国環境省が行う次の2つのプログラムに関する支援だった。
「ADIPURA」自治体を対象に、環境に配慮した地域づくりの取り組みを表彰するプログラム
「ADIWIYATA」学校を対象に、環境教育の取り組みを表彰するプログラム

【営業術①】日頃のコミュニケーションが人脈を手繰り寄せる

里見さんが最初に取り掛かるうと考えたのは、市のADIPURA受賞に向け、市内にある「ゴミ銀行」の利用を促進することだ。ゴミ銀行は、市などの支援を受けながら運営されている民間組織。住民がゴミを持ち込むと、買い取る金額を彼らの「通帳」に記載し、後日、「引き出し」に応じるという仕組みである。しかし、実態を探ってみると、厚かかわるNGOが存在しており、市の立場での介入は得策でないことが判明した。そこで里見さんは、ADIPURAに関する支援に注力することに軌道修正。着任して3カ月が過ぎたころだった。

【営業術②】日頃のコミュニケーションが人脈を手繰り寄せる

学校でみずから環境教育授業を行い、それをベースに教員たちでADIPURAの受賞に向けた活動を進めてもらう。そんな青写真を描いた里見さんだったが、環境教育授業を行う学校については、配属先からの推薦などはなく、自力で確保していくほかないという状況だった。その開拓の足がかりとなったのは、先輩隊員に紹介された市内のある学校の校長だった。同校を訪ね、「環境教育授業を実施させてほしい」とお願いすると、校長は快諾。そうして

里見さん基礎情報

PROFILE

1985年生まれ、群馬県出身。理系大学院の修士課程を修了後、印刷会社に就職。経営管理部で主に事業計画の策定や業績管理に携わった後、2017年4月、協力隊員としてインドネシアに赴任(民間連携ボランティア制度)。18年4月に帰国し、復職。

活動概要

マカッサル市(南スラウェシ州)の環境管理事務所に配属され、主に以下の活動に従事。
 ●住民説明会での環境啓発
 ●学校での環境教育授業の実施
 ●小学校教員向けの環境教育に関するワークショップの実施(他ボランティアとの協働)

ることもありました」

【営業術②】「プレゼンテーション」の活用

里見さんが「営業活動」によって獲得した活動校での環境教育授業をスタートさせて間もなく、ある問題が表面化した。授業では「ゴミ」への意識を高めることを狙い、日本の学校で行われている「ゴミの分別」などの取り組みを紹介したが、授業を行った学校を後日訪問すると、相変わらず校内にゴミがボイ捨てされているケースがあったのだ。環境教育授業が子どもたちの行動変容に結びつくためには、教員たちの理解と協力が必要。しかし当該校の教員たちには、里見さんの授業を受けて自ら子どもたちへの働きかけを行おうという意思がなかったのだ。

この事態を打開するためのヒントを見つけたのは、ある学校で初めて授業を行うため、事前の打ち合わせで同校を訪れた際のことだ。計画している授業の概要を説明したところ、「口頭の説明だけではわかりづらい。『プレゼンテーション』をしてくださいませんか」との要望を受けたのだ。

「必ずしもJICAボランティアのことを知っているわけではない相手に対して、こちらがどんなことをやりたいと考えているのか、言葉だけでは正確なイメージが伝わらないですね。私自身も腑に落ちた要望でした。そうして里見さんは、以後、初めて授業を行う学校での事前の打ち合わせ



① 小学校で環境教育授業を行う里見さん
 ② ③ 学校で環境教育授業をスタートする際に、対象校の教員に向けて自身の意図を知ってもらうために行ったプレゼンのスライド例。②は自己紹介のページ、③は実施可能な環境教育授業の中身を説明するページ

学。するとそこには、他校の校長たちもよく見学に訪れていた。里見さんは彼らに話しかけ、環境教育を行っていることを宣伝。そうして、新たな訪問先を獲得していったのだ。
 「人が集まる場所は、一気に人脈を広げるチャンスなのです」
 一方、里見さんは日頃からインドネシアの人たちと積極的にコミュニケーションをとることも大切にした。「市内には600もの小・中学校があります。そのため、街に出れば至る所で教員の方たちと出会う可能性があるのでですね。ですので、地域のイベントなどにも足を運び、服装などから『教員らしい』と見える人がいると、声をかけるようにしていました。もちろん、空振りも多々ありましたが、そうやって話しかけた人が実際に校長先生であり、その後の活動につなが

「JICAの事業やそれまでの環境教育授業の実績を述べると、ぐっと信頼を寄せてもらえました。また、提供可能な授業の具体的な「カタログ」を示すことで、教員たちの興味を引くこともできました」
 加えて里見さんは、初めて授業を行う学校での事前の打ち合わせで、対象校の現状やニーズを把握するためのアンケートも実施。その結果をもとに対象校と話し合い、複数回にわたる授業の流れを作成した。そうして、「ニーズ」と「シーズ(活動の種)」のすり合わせをしたことで、里見さんの環境教育授業が現場の状況に合ったものになっただけでなく、授業に参加する教員が増加。なかには熱心にメモを取る教員も現れたのだ。

里見さんは最終的に、全28校、合わせて96回の授業を実施することが叶った。うれしかったのは、里見さんが任期を終えるとき、活動先の校長から「後任の隊員も学校で環境教育をしてくれるのか？」という質問を受けたこと。次のボランティアへとバトンをつなげられたことにひと安心し、里見さんは帰国の途に就いたのだ。

後輩ボランティアの方々に

基本的なことですが、とにかく「現場」に足を運び、いろいろな人と出会い、積極的に話しかけてみるのが、JICAボランティアの活動にとっては大切な第一歩だと思います。私の場合、海岸でゴミ拾いイベントを実施したいと考えた際、事前に海岸の様子を見に行ったところ、ゴミ拾いをしている学校関係者に出会うことができ、それが縁で学校巡回につながったということがあります。まずは関係者の根拠地に足を踏み入れてみると、思わぬ縁が生まれるかもしれません。

Perkenalan diri

- Nama : Gaku Satomi
- Ditugas: Dinas Lingkungan Hidup, Makassar
- Dari : Tokyo, JICA
- Pekerjaan sebelumnya : Toppan Printing P.T. (Bidang Perencanaan)
- Jurusan di Universitas : Kimia (S2) (Tokyo University of Science)

AKTIVITAS - GAMBAR POHON LINGKUNGAN HIDUP

- TARGET : SD-SMA
- TUJUAN : Memikirkan apa yang bisa dilakukan untuk LH diri sendiri
- CARA LAKUKAN : Menulis hal yang bisa dilakukan ke kertas bentuk daun - Menempelkannya ke gambar pohon
- BARANG : Kertas (warna hijau) - Spanduk atau kertas besar



「言葉」による営業②・井戸端会議型
西島百合子さん(ガーナ・PCインストラクター・2015年度4次隊)の事例

積極的な挨拶とコミュニケーションで生徒たちの授業への出席率が向上

教員養成校に配属され、ICTの授業を担当することになった西島さん。生徒の出席率が低いことが課題だったなか、授業の空き時間に校内を歩き回り、生徒たちとコミュニケーションを図ったことで、出席率が向上していった。

PCインストラクター隊員として西島さんが配属されたのは、3年制の教員養成校。ガーナ第4の都市にあり、生徒数は1300人へのぼった。ひとクラスは30人程度で、いずれの学年も10以上のクラスがあった。ICTの授業が必修とされていたのは1、2年次。2人の教員に非常勤のインターンシップ生を加えた3人が担当していた。教員数は明らかに不足しており、西島さんは着任早々から、13クラスある1年生のすべてのICT授業を、一教員として担当することとなった。

その後もしばらく、半数以上のクラスで生徒が授業に現れず、残りのクラスも出席人数は3、4人という状態が続いた。

「初回の授業で待てど暮らせど生徒が来ないのには、本当に驚きました(笑)。当初は生徒が出席しない理由もわからなかったため、ひとりでも生徒がいれば、とにかくカリキュラムに沿った授業を続けていきました」

なぜ生徒の出席率が低いのか。西島さんは閑散とした教室での授業を続けながらこれを探り、原因を次のように整理した。

●西島さんが「ICTの教員」であることが、生徒たちに認識されていない。

●生徒たちは外国人と触れ合う経験が少ないため、西島さんとの間に距離がある。

●生徒たちが興味・関心を持っていないような授業内容となっている。

名前を呼んで西島さんに挨拶してくれるようになっていった。

【営業術②】人が集まる所には積極的に参加

配属校では毎週、月曜日の午前6時30分から朝礼が行われ、生徒と教員たちが全員出席することになっていた。西島さんが初めてその場に出席したのは、着任して2カ月が経ったころのこと。西島さんはこの朝礼も「営業」の場として活用した。

「そもそも私は朝礼が行われていることを知らされていなかったんですね。同僚たちは、まさか私が出席するとは思っていなかったようでした。その様子を見て、やはり『ゲスト扱い』をされているのだと再確認し、以来、毎回出席するようにしました。すると、生徒たちからは、『教員と同じ並びにいる私』が目に入るんですね。そこから少しずつ、生徒たちに『教員』として認識されるようになっていきました」

その後、迎えた新学期の冒頭に行われた全校集会でも、改めて全校生徒の前でICTの教員として挨拶をする機会を得ることができた。また、日常生活でコミュニケーションを取ることも続け、スポーツ大会などの学校行事に積極的に参加するなど、生徒や教員と一緒に過ごす時間を意識的に設けていった。

こうして顔を売り続けた結果、「見知らぬ外国人」から「ICTの教員」へと変わり、第一関門を突破した西島

●1年生ではICT授業が成績評価の対象外となっている。

●時間割に不備があり、ICT授業がほかの授業とバッティングしているクラスがある。

【営業術①】校内を歩き回って顔を売る

生徒たちとの間の「距離」が気になり始めたのは、着任後すぐのことだ。教員であるということが生徒たちに周知されていなかったため、彼らにとって西島さんは、突如現れた単なる「見知らぬ外国人」。戸惑いからか、生徒たちに話しかけても、一歩引いた反応を取られていた。

「距離」を感じた点では、ICT科以外の教員たちも同様だった。任地では援助機関の外国人スタッフが視察に訪れるのは珍しいことではなく、西島さんも当初は教員たちに「2年間さん。授業に出席する生徒も徐々に増加していき、着任当初の数倍へと押し上げることに叶ったのだった。時間割上のコマのバッティングについても学校側に改善してもらうことができ、出席者がゼロのクラスもなくなった。

生徒や同僚たちとの関係構築と並行して西島さんが力を入れたのは、授業の魅力を高めるための対策だ。2年生がICT科の試験があるため、机上での学習が主となる。そのため、PCに親しみ、実践を積むことができるのは1年生の間のみ。しかし、それまでは1年生の授業でも、文字を羅列し、同僚が説明していくという流れで進められていた。それでは生徒たちの興味を引くことができないと考えた西島さんは、教材に「アニメーション」を組み込んだり、PC操作の練習のために「ゲーム」を取り入れるなど、生徒たちが楽しめるような授業を試みた。そうした工夫に対する生徒たちの反応は上々だった。授業で出す課題に熱中して取り組む姿が見られたのだ。やがて、「西島先生の授業は楽しい」と評判になっていった。

授業の出席率を高めるために奮闘する西島さんの姿は、同僚たちの心にも響き、彼らとの関係の深化にもつながっていった。ある同僚は、「あなたは教員のひとりとして、私たちに歩み寄り、一緒に活動をしてくれる」との言葉をかけてくれた。「ゲスト」としてではなく、「教員」として受け入れてもらえるようになったことを実感する出来事だった。

後輩ボランティアの方々へ

「大きなことを成し遂げよう」「何か成果を残さなければ」と焦る気持ちもあると思います。しかし、「毎日、自分から元気に挨拶をする」「顔を合わせるチャンスを積極的につくる」といった小さなことの積み重ねが大事ではないかと感じます。自分の存在意義を否定されてしまうこともあるかもしれませんが、焦らずに。まずは自分にできることを精いっぱいやることから始めてみてください。

授業の空き時間に生徒たちとコミュニケーションをとる西島さん。折り紙に興味を持った生徒たちと花を作成した



① ITC授業で生徒たちにPC操作の指導をする西島さん
② 毎週月曜日に行われる朝礼の様子

西島さん基礎情報

PROFILE

1986年生まれ、神奈川県出身。帝京大学を卒業後、2008年より外資系ITコンサルティング会社にシステムエンジニアとして7年間勤務。16年3月に協力隊員としてガーナへ赴任。18年3月に帰国し、同年8月より地域おこし協力隊員として愛媛県宇和島市で勤務。

活動概要

- タマレ教員養成校(ノーザン州タマレ市)に配属され、主に以下の活動に従事。
- ICTの実技授業の実施
- ICT授業の方法に関する同僚への助言
- 校内のPCのメンテナンス

特集 2

JICAボランティアの営業術

JICAボランティアの 営業術



- 1 小学校で行ったモリンガの植樹
- 2 活動先開拓でフル回転した自転車に乗る藤掛さん。背負っているのはモリンガの苗
- 3 モリンガの「営業」のために作成した資料。「栄養素が豊富」というポイントが印象付けられるよう、できるだけシンプルに作り心かけた

「トマト栽培を行うのに支柱を立てない」など、彼らの栽培方法には日本の常識からすると気になる点は山ほどありました。でも、気候や資材、資金など、与えられた条件のなかで、彼らにとって可能な最善策が取られているのを見えていきました。何かを改善するとすると、費用がかさんでしまうケースばかりだったので。」

そうして藤掛さんは、既存の栽培車で行ける地域に野菜農家がいなかった同僚たちに尋ねたが、期待していたような情報は得られなかった。そうして、活動対象となる農家を自力で探すことが、藤掛さんに課せられた最初のステップとなったが、当初はこれが難航した。自転車で配属先の近辺をいくら探しても、見つかるのはトウモロコシなどの穀物畑ばかり。野菜畑が一向に見当たらないのだった。

藤掛さん基礎情報

PROFILE

1987年生まれ、栃木県出身。新潟大学農学部を卒業後、東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程に進学。三菱食品株式会社勤務した後、2016年3月に協力隊員としてベナンに赴任。18年3月に帰国。

活動概要

農業牧畜水産省ウエメ・プラトー農業促進センターのケトゥ村落開発支所(プラトー県ケトゥ市)に配属され、主に以下の活動に従事。
●トマト栽培の技術指導
●モリンガ栽培の普及に向けたPR活動

藤掛さんが実際に取り組んだのは、住民の目に触れることが多い地域の小学校や幼稚園の敷地で植樹を進めること。教育行政機関の承認を得たうえで、実験圃場で育てた苗を手にも、小学校や幼稚園などを訪問。モリンガの効能や植樹の主旨などを説明し、「敷地で植樹をさせてほしい」と交渉した。

この「営業活動」でも、前述のAさんが助っ人となってくれた。モリンガ栽培の普及について相談すると、協力を快諾し、植樹先開拓の「営業」に同行してくれた。訪問先でAさんは、「この学校は数ある学校のなかから選ばれた、選りすぐりの学校なのです」と力説。そうした二人三脚の「営業」の結果、藤掛さんの任期中に6カ所でもモリンガを植樹することが叶ったのだった。

「トマト栽培を行うのに支柱を立てない」など、彼らの栽培方法には日本の常識からすると気になる点は山ほどありました。でも、気候や資材、資金など、与えられた条件のなかで、彼らにとって可能な最善策が取られているのを見えていきました。何かを改善するとすると、費用がかさんでしまうケースばかりだったので。」

そうして藤掛さんは、既存の栽培車で行ける地域に野菜農家がいなかった同僚たちに尋ねたが、期待していたような情報は得られなかった。そうして、活動対象となる農家を自力で探すことが、藤掛さんに課せられた最初のステップとなったが、当初はこれが難航した。自転車で配属先の近辺をいくら探しても、見つかるのはトウモロコシなどの穀物畑ばかり。野菜畑が一向に見当たらないのだった。

時間ばかりが過ぎていくことに焦りを感じた藤掛さんは、ひとりで行うことができる第2の活動に着手する。それは、配属先の近くに実験圃場をつくり、野菜栽培をみずから実践しながら、土壌や気候などの栽培条件を確認することだ。

ようやく転機が訪れたのは、着任してから半年が過ぎたころ。配属先で研修を受けていた農業学校の学生のなかに、藤掛さんの野菜栽培を手

留とし、新たな活動の軸を探ろうと考えた。

二人三脚で植樹先を開拓

藤掛さんは、活動の活路を求めて情報収集に明け暮れた。そうして目に留まったのは、先遣隊員が行った「モリンガ」の栽培を普及させる事例だった。モリンガは、成長が速く、早魋にも強いので栽培が容易で、特に栄養価の高い葉は食用としての需要が見込めるもの。訪問先の農家のなかに、これを栽培している例があったことから、早速その農家から種を購入し、栽培方法についてアドバイスを受けた。農家にとって栽培方法の知識は貴重な「財産」にほかならないが、それを提供してもらえたのは、「手伝い」による「営業活動」によって築いた関係性があったからだった。

藤掛さんが実験圃場で栽培を試みると、わずか3カ月で20、30センチほどに成長し、任地の環境にも適していることがわかった。さらに、栽培と並行して藤掛さんは任地でモリンガの認知度調査を実施。富裕層のなかには常食している人もいたが、ほとんどの住民は知らないということがわかった。

藤掛さんが実際に取り組んだのは、住民の目に触れることが多い地域の小学校や幼稚園の敷地で植樹を進めること。教育行政機関の承認を得たうえで、実験圃場で育てた苗を手にも、小学校や幼稚園などを訪問。モリンガの効能や植樹の主旨などを説明し、「敷地で植樹をさせてほしい」と交渉した。

この「営業活動」でも、前述のAさんが助っ人となってくれた。モリンガ栽培の普及について相談すると、協力を快諾し、植樹先開拓の「営業」に同行してくれた。訪問先でAさんは、「この学校は数ある学校のなかから選ばれた、選りすぐりの学校なのです」と力説。そうした二人三脚の「営業」の結果、藤掛さんの任期中に6カ所でもモリンガを植樹することが叶ったのだった。



後輩ボランティアの方々へ

私は「協働作業」を通じて関係を深めた人たちからの紹介で、活動先の農家を獲得することができました。何かのきっかけをくれるのは現地の方々。彼らと腰を据えて関係をつくることも大切な活動のひとつだと思って、じっくり向き合ってみてはいかがでしょうか。私は活動先の農家となかなか出会えず、任期の前半は焦る気持ちを抱き続けていました。振り返ってみると、自分を追い詰めるよりも、「1年目は人脈づくりと情報収集の期間」と決めてしまってもよかったのかなと思います。

2年間の活動を大きく支えてくれた研修生のAさん(左)と藤掛さん。藤掛さんが協働作業を行った活動先農家にて

CASE_3



「行動」による営業①・一点突破型

藤掛知英美さん(ベナン・野菜栽培・2015年度4次隊)の事例

「協働作業」を重ねることで 活動のパートナーとなる農家を獲得

農家を対象に野菜栽培の技術指導を行うことになった藤掛さん。当初、指導相手を見つけるのに苦労したが、一軒の農家で農作業の手伝いを通じてじっくりと関係を築いた結果、芋づる式に活動の協力者を獲得することができた。

伝いたいと申し出てくれた人がいた。そうして、その学生(以下、Aさん)とともに農作業に取り組みながら、コミュニケーションを重ねていくと、彼との間に信頼関係が生まれつつあった。そうしてあるとき、藤掛さんは指導対象となる野菜農家を見つかるのに苦戦していることを相談。すると思いがけず、Aさんに野菜農家を紹介してもらうことができた。藤掛さんが自転車で行っていたエリアの農家だったが、奥まった場所に畑があったため、見つけられずにいたのだった。

【営業術】 作業を手伝い、共に汗を流す

紹介されたのは、ひとりでトマト畑を切り盛りする二十代の農家。藤掛さんは「ベナンの農業を教えてほしい」と伝え、まずは水やりや草む



「行動」による営業②・アクティブ型」
 山下依里佳さん(バヌアツ・小学校教育・2016年度1次隊)の事例

「エアロビクス教室」などを開催し、同僚たちとの相互理解を深化

児童数1200人という大規模校で算数授業の質向上に取り組んだ山下さん。多くの教員に指導法を伝えるには「ワークショップ」などの手段が不可欠だったが、その実現を後押ししたのは、活動以外の場で築いた彼らとの信頼関係だった。

山下さんが配属されたのは、バヌアツ最大の島・エスピリッツサント島にあるカメワ小・中学校。およそ1200人の児童が通う大規模校で、8学年(1〜6年生が小学校、7〜8年生が中学校)のそれぞれに4クラスずつあった。山下さんのメインの活動となったのは、小学校の算数授業に関して、教員の指導力向上を支援することだった。

同校は島内の小学校を対象に行われる算数の計算テストで、いつも成績が最下位近くをさまよっているような学校だった。同僚たちに「なぜテストの成績が低いのか?」と尋ねると、彼らは「最近では家で親が勉強を教えないから」「児童たちが怠けているせいだよ」と答える。しかし、その正確な要因は、着任当初に行った授業観察で顕著に見えてきた。ある単元で児童の多くがつまづいていても、同僚たちは次の単元へと授業を進めてしまっていたのだ。例えば、6年生の児童の大半が計算テストで「2の段の掛け算」を解くことができていなかった。にもかかわらず、同僚たちは掛け算の知識が必須である「確率」や「分数」など難しい単元へと授業を進めてしまっていた。

「はじめから感じていたのは、同僚たちの協力なしに配属先の現状を大きく変えるのは難しいということでした」

32あるクラスのすべてを巡回したり、すべての同僚たちと個別にじっくり話し合ったりするのは難しい。そのため、配属先の算数授業の質を上げるためには、一度に大勢の同僚たちに技術を伝えられる「ワークショップ」などの手段をとることがどうしても必要となるが、その開催は彼らの理解と協力なしには成り立たない。そうして山下さんは、同僚たちと信頼関係を築き、彼らに協力して

もらえる素地を整えることに、まずは力を入れることにしたのだった。

【営業術①】おしゃべりの輪に飛び込む

山下さんは配属校に派遣された初代隊員。ほとんどの同僚にとって、初めて接するJICAボランティアが山下さんだった。当初、なかには山下さんに冷たい態度をとる同僚もいた。そうして、「どんな人が、何をしにやって来たのか」を理解してもらうことが最初のステップとなったのだが、そのチャンスは同僚たちの「おしゃべり好きの習慣」にあった。彼らは時間が空くと、よく中庭などで輪になって談笑していた。人を楽しませることが好きな山下さんは、他愛もない質問などを用意して、積極的に彼らの話の輪に加わった。「バヌアツ人は基本的にシャイな人

の輪のなかで、肥満を気にする同僚たちからこうした要望が出たのは、着任して1カ月が過ぎたころだった。そこで山下さんが考えたのは、放課後に「エアロビクス教室」を開くというアイデアだ。

「もちろん、要請書には『エアロビクスの指導』なんて書いてないんです(笑)。でも、できることがあればぜひやってみたいと思っていたので、教室の開催を提案しました」

その場にいた校長から許可が出たことが決め手となり、放課後に空いた教室で実施する運びとなった。とはいっても、エアロビクスの経験などほぼなかった山下さんは、動画サイトをみて研究。バヌアツの人が楽しめるような動きを取り入れて準備を進めたのだった。

迎えたエアロビクス教室初日。準備の甲斐もあって、教室は大盛り上がり。張り切って取り組む同僚たちの姿が見られた。その後、「ヨガ」や「日本語教室」など、新たな要望が出るたびに、山下さんは快諾。定期的にそれらの「放課後教室」を実施した。

教室を開くにあたり、山下さんは「楽しませる工夫」を怠らなかつた。例えば日本語教室の場合、毎回用意する資料には、4コマ漫画を描いて同僚たちを登場させた。資料は教室がはじまる前に配布。同僚たちの好奇心を煽ったのだった。「放課後教室を始めたときは、『とにかく何か行動したい』と思っていました。でも、あとから実感したので

すが、『1対多』の空間を持てたことは、多くの同僚と互いに理解し合える絶好の機会でした」

ワークショップなど新たな取り組みを開始

同僚たちに対し、算数の指導法に関する定期的なワークショップを開催することや、児童の学力向上に向けて以下の4つの取り組みを導入することを提案したのは、放課後教室を始めてから1カ月が経ったころだ。それまでの授業観察で把握したことを踏まえ、同僚たちの授業にある問題点とそれらへのアプローチの方法に関して、ひと通り整理がついた時期でもあった。

- ① 百マス計算(足し算・引き算)を毎日実施する。
- ② 毎週金曜日に、4〜6年生の全クラスで同じ内容の百マス計算を実施し、成績を掲示する。
- ③ 算数授業の一部を山下さんが担当し、担任教員に見学してもらった。
- ④ 月に1度、全校で基本的な計算のテストを実施する。

放課後教室などを通じて、「学校をみんなと一緒に良くしていきたい」という山下さんの思いは同僚たちに伝わっていたことから、これらの新機軸の提案は彼らにスムーズに受け入れてもらうことができた。そうして山下さんが任期を終えるころには、島内の小学校の計算テストで上位の成績を収めるまでに児童たちの計算力は向上したのだった。

後輩ボランティアの方々へ

「いかに相手と向き合おうとするか」がJICAボランティア活動の醍醐味だと思います。算数授業の改革を行った際、サボリ癖のある3人の先生のクラスが取り残されてしまいました。協力を得るのに苦戦し、腹が立つこともありましたが、諦めずにかかわる姿勢を貫きました。すると、徐々にではありますが、彼らも意欲的に算数の活動に興味を持って取り組んでくれるようになりました。こちらに「愛」や「思い」があれば、相手にも伝わると信じています。



- ① ③ エアロビクス教室などで学校の「エンターティナー」と評判になった山下さんには、その後、校内でさまざまな余興を依頼されるようになった。①は、火山の噴火で学校に避難していた地域住民を相手に行った日本の紙芝居の上演。③は、児童を相手に武士のカツラを付けて行った日本文化紹介の授業
- ② 山下さんが提案し、導入された計算テストの結果は、学校のオフィスに掲示。可視化したことで、児童と教員が学力の状況を把握できるようになった



山下さんが放課後に実施したエアロビクス教室に参加する同僚たち

山下さん基礎情報

PROFILE

1989年生まれ、福井県出身。大学を卒業後、東京都の小学校に教諭として4年間勤務。2016年7月、協力隊員としてバヌアツに赴任(現職教員特別参加制度)。18年3月に帰国。

活動概要

- カメワ小・中学校に配属され、主に以下の活動に従事。
- 同僚に向けた算数指導法のワークショップの実施(月1回程度)
 - 算数授業に関する各種改革
 - 日本についての授業の実施
 - 同僚に向けた放課後教室の開催(エアロビクス・ヨガなど)

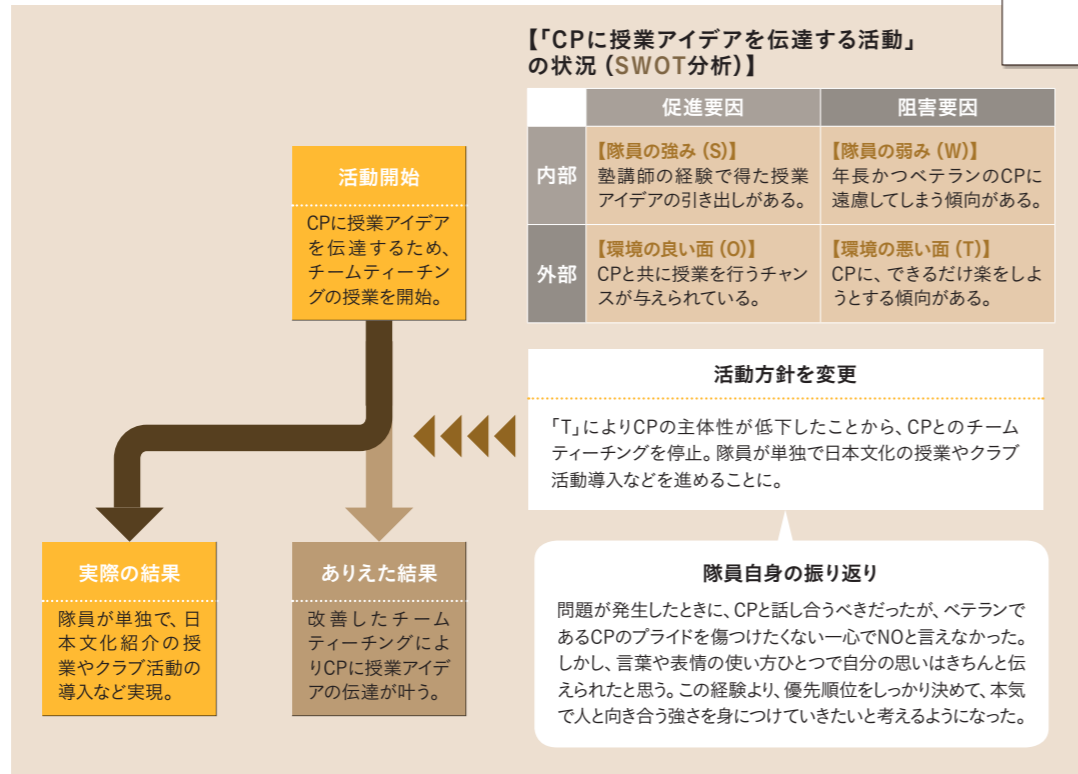
特集 2

JICAボランティアの営業術

“失敗”から 学ぶ #166



事例整理



私は、初代の隊員として配属先であるキルギスの養護施設に派遣されたため、私を含む配属先のスタッフも手探り状態からすべてが始まった。まずは私の目指す活動を伝え、配属先の希望にも沿えるように調整を行ったところ、「子どもたちの学びの成長や養護施設での生活が充実するような活動を提案し、実行してほしい」と言われ、大変恵まれた環境であった。しかし、同時に「自由」とは、「放任」ということでもあり、自らの「責任」も大きく、「積極性」が大きく問われた2年間でもあった。

赴任当初、私は施設に隣接されている学校の英語の先生であるカウンセラーパート(CP)と一緒に授業をすることになった。授業を見ているとCPはベテランで経験があり、クラスをきちんと運営しているように感じたが、私が授業を始めた途端に教室からいなくなってしまう事態がたびたび発生するようになってしまった。ときには、「この日は休みたいから、私の代わりに2日間授業を任せたい」「子どもたちの成績をあなたの思うように適当につけてほしい」など、マンパワーになりかけていた。協力隊の目的は、決

て現地の人の仕事を楽にすることではなく、自分自身の技術や強みを生かして、目の前にいるCPの意識や、私であれば、子どもたちの視野、興味を広げていくことではないのかとしばらく悩んだ。その結果、私は、私自身の日本文化・英語・算数などのクラブ活動と、平和学習や異文化理解教育などのセミナーやイベントの開催を主な活動として優先し、ALTとして英語の授業にかかわる時間をかなり減らしてしまった。

活動も終盤をむかえ、積極的にさまざまなことを発信する私の姿は配属先の同僚たちにも認められ、CPとも信頼関係はできあがっていた。しかしCPに「私は本当にあなたと授業をしたかった。でもあまり授業に来てくれなくなったね。子どもたちもいつでもあなたを待っていたよ」と言われたことが今も胸に残っている。そのときになってやっと「私はなぜ問題発生時にCPと話し合わなかったのか。きちんと向き合っていれば、彼女の授業に対する意識を変えたり、お互いに新しい授業アイデアをシェアしたりすることでより良い授業を子どもたちにも提供できたのかもしれない」と後悔した。

マンパワーにならないようにと CPと距離を置いて活動し、後悔

文 片山美弥さん (キルギス・青少年活動・2015年度3次隊)

他ボランティアの分析

授業をする姿を見てもらう

私の場合、活動先の学校で体育の先生として迎えられました。最初のうちは、通常通りに授業を行っていましたが、そのうちに学校側が担当の先生を配置してくれたり、授業で行ったストレッチの動きを取り入れてくれたりなどするように。私が授業することによって、周囲の意識が変わっていくこともあるのだと思いました。また、CPの考えを吸い上げるために、直接聞くことが難しければ、同僚に相談してみるのも一案です。「こんなことをやってみたいから協力してほしい」など、もっと発信してみたら、ご自身の活動について、より知ってもらえたのではないかと思います。

文=協力隊経験者

- アジア・青少年活動・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

青少年健全育成のため、主に体育の授業や授業サポートを行う。

活動から一步離れた場所で信頼関係を構築

私自身、CPの授業に対するモチベーションが下がって悩んだこともあり。そのときは、授業で使えるような新しい折り紙の本や動画を一緒に見てついたり、お茶をして(私の派遣国ではお茶を飲む文化がある)全然違う話をし、気分転換をしたりするなど信頼関係の構築を何よりも優先させました。ボランティアに来たからには活動を成功させたいと誰もが思うことですが、一見活動には関係なさそうなこと、CPとお茶を飲むことや一緒に楽しい時間を過ごすことが、結果的にはCPとよい関係が築け、よい活動につながると思います。

文=協力隊経験者

- アジア・青少年活動・2014年度派遣
- 取り組んだ活動

派遣国の公立保育園でCPと共に3~6歳の子どもに美術(折り紙、お絵かき、粘土など)を教えた。



配属先である養護施設では孤児や家庭の事情で親と離れている子どもたちが暮らしており、彼らの情操教育のために、片山さんは、サマーキャンプでのスポーツ・物づくりや、広島平和学習セミナーなどを実施した。写真は、広島の小学生から届いた手紙の前での1枚



PROFILE

1987年生まれ、広島県出身。2010年、広島修道大学法学部国際政治学科を卒業後、株式会社鷗州コーポレーションにて塾講師として子どもたちの学習・進路指導に携わり、退職後、ワーキングホリデー制度を利用し、カナダへ。16年1月、協力隊に参加。18年1月に帰国。

活動概要

キルギスの首都ビシュケクにて、養護施設であるドイツのNGO「SOS子どもの村」に配属され、以下の活動を行った。

- 施設内に住む約100人の子どもに対し、日本文化、英語、算数のクラブを開講。
- 施設に隣接する学校で英語の授業やイベントを開催。

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G231

デザイン

派遣中 ▶ 7人

累計 ▶ 97人

分類 ▶ 人的分野

活動例 ▶ 販売促進ツールの提案や、職業訓練校でのデザイン指導など

類似職種 ▶ コンピュータ技術など

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年6月30日現在。



配属先でデザインを教える伊藤さん。要請内容以外にも、他隊員の活動を手伝ったり、文化交流イベントやJICAの現地広報の仕事に携わったりなど、やりたい事があれば自由に挑戦できたのも魅力だったという

#A201

行政サービス

派遣中 ▶ 8人

累計 ▶ 62人

分類 ▶ 計画・行政分野

活動例 ▶ 行政機関での業務効率の向上や職場改善など

類似職種 ▶ マーケティングなど

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年6月30日現在。



所属していた部門の職員と白川さん(中央の一番前)。一番左側にいる男性が最もお世話になった部長。給与制度の専門家所属局局にいないことから、初年度は部長と2人で主にプロジェクトを進めた

PROFILE

1981年生まれ、東京都出身。筑波大学芸術専門学群卒業後、広告制作会社2社に合計約8年勤務。2014年に退職後、協力隊に参加。17年3月帰国。同年10月より短期ボランティアとしてパラオ国際サンゴ礁センターに配属され、PR・土産品などのデザインを担当。18年11月よりパラオの同センターで現地雇用契約。08年よりカンボジアNGO「アンコール・クライマーズネット」の広報を担当している。

活動概要

ボツワナ国立博物館の展示・PRツール・イベントツールのなどデザイン制作を担当するテクニカル・サポート・サービス(TSS)部署に配属され、以下の活動を行う。
●展示デザイン、PR、イベントなどのデザイン
●現地職員への技術移転



伊藤洋美さん

(ボツワナ・2014年度1次隊)

PROFILE

1976年生まれ、北海道出身。2001年、法学部国際関係法学科を卒業後、人材派遣会社などを経て、16年1月、協力隊に参加。18年3月、帰国。現在、ソフト開発会社に就職し、ミャンマー・ヤンゴンにてIT・日本語学校の運営に従事する。

活動概要

ボツワナ大統領府公務員庁にて、国家公務員向け給与体系の見直しプロジェクトを推進するため、下記の活動を行う。
●既存の国家公務員向け給与制度の理解
●日本を中心とした他国の給与制度の研究・報告
●給与制度関連概念の整理、部局案の作成・共有
●大統領府公務員庁案の作成・共有



白川智久さん

(ボツワナ・2016年度4次隊)

Q 活動の最大の困難は？
スケジュールをまったく考えていない「三つ折りパンフレット」の依頼がきたとき。イベントで使う予定のパンフ制作の依頼が、開催日の前日に到着。デザイン・印刷・加工の時間が考慮されておらず、でも依頼者は泣きついてくる。その場では怒ったものの断る訳にもいかないので、結局、残業などで対応せざるを得ませんでした。

Q メインの活動は？
デザインの仕事は、配属先のプロジェクトごとのチーム(考古学・自然史学・民俗学など)から依頼され、実施。しかし、他部署から持ち込まれる仕事の多くが無理なスケジュールで、断らない現地デザイナーにも問題があるのですが、ボツワナ人は同じコミュニケーションの中でNOと言うことが苦手な傾向があり制作期間が足りず、質が落ちるといった悪循環だったため、まず職場のワークフローの改善に着手しました。要請内容にあった技術移転は、人材育成に近かったです。道具を使い、何をどうするかという考えを引き出す行為が必要で、デザイナー育成は協働する中で教えていく方が良いと思いました。結果的にカウンターパートは私のデータを見て、良いと思ったものをほぼ自動的に拾っていくように。逆に、口頭で「このやり方が私はいいと思う」と教えたことは定着しませんでした。

Q 試みた解決策は？
必要な情報の入手には、個人の信頼度を上げること、解決する知恵を持つベテラン職員の助けを真摯に求めること(彼らを巻き込むこと)が問題の解決に繋がると考えました。私自身の信頼度が上がると、特別に情報を開示してくれる職員も出てきました。関連する情報が大統領府になくても、他の省に存在する可能性があります。そのような情報は各省に広い人脈を有するベテラン職員(課長級)を介して、開示していただくことが早く、確実です。しかし、ベテラン職員は忙しく、動いていただくには、日々の仕事を通じて、私の当該プロジェクトに懸ける思いと力量を認めてもらう必要があると感じました。また、丸投げの依頼ではなく、彼らの負担がなるべく軽くなるような仕事の振り方の工夫が必要と感じました。

Q 試みた解決策は？
会議でスケジュールの確定をさせる試みをしました。「どういう工程なの？」から始まり、質問のみの形式で進め、「それにどれくらい時間がかかると思う？」を連発。同じことを何度聞かれても絶対に怒らないようにし、気軽にコミュニケーションが取れるように心がけました。活動後半でスケジュール無視の仕事が「最近ない」と感じ、スタッフの仕事のやり方を変えてくれたことに気がつきました。一番大事なのは根気と我慢かもしれません。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。
文化的背景が違う人間にデザインを教える際には、なぜ日本人が「ここにこだわるのか？」を、現地人が納得する説明ができないことが多いことに気がつきます。おそらく、それがデザイナーの自己満足的な観点であり、一方、現地人が納得する説明ができることは一般化できるセオリーなのだと気がつきました。結果的にブラッシュアップしたセオリーの中で仕事をするので、日本でやっていた頃より目的が明確な仕事になったと思っています。もう1点、広告系のグラフィック・デザイナーに特化した話ですが、この業界は転職する人が多く仕事も豊富にある。個人的に帰国後、再就職に大きな壁は感じなかったので、安心して挑戦してください。

Q 試みた解決策は？
あらゆる場面で、正確な情報が必要となりますが、その情報が維持・更新されていないか、そもそも存在していないことがありました。そのため、必要な情報を自ら収集し、編集する必要があるということが最大の困難であったと言えます。何をすることも初めに、目の前にある情報が最新の正確な情報であることを確認しなければならず、思うように作業が進まないという状況に頻りに陥りました。私が必要としている情報を持っている人がいても、その人が情報を持っていることを、私を含め他の職員に言わないというケースもありました。

Q 試みた解決策は？
報連相、メールへのレスポンスの速さなど、事務職であればアフリカでも当然のように求められます。周囲の現地職員ができていなくても外国人の協力隊員には求められますし、課長級以上は当たり前のことを当たり前にやれるかどうかで、まずは人物判断をしていました。率先して実行する姿を見せることも大切な活動だと思っています。



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
フェアトレードショップ販売員

after
アフリカ専門輸入販売会社社員



after

ケニアで買い付けをする福田さん（左写真）と、現地の生産者に会う福田さん（右写真）。デザインの勉強をした経験がないため、依頼した品と出来上がりの品が違うこともあり、デザインの勉強、新しい商品の知識、語学力、これから身につけるべきことはたくさんあるという。それでも、日本の企業や現地の生産者たちと、一緒にものづくりができる環境にいられることは喜びでもある。また、商品の説明をしているときに、商品が目の前にいる人と自分をつないでくれるツールのように感じる瞬間があるという。そんな瞬間を増やすため、情報収集し、魅力を伝えていきたいと福田さんは思っている

2018	2017	2015	2013	2006	2001	1982
<p>有限会社 アフリカスクエア</p> <p>設立:1992年5月(開設は1990年) 本社所在地:埼玉県川越市増形3-2 事業内容:アフリカ産品専門の輸入販売など。 従業員数:32人(2018年2月現在) URL: http://www.african-sq.co.jp/</p>	<p>10月、帰国②</p> <p>1月、有限会社アフリカスクエアに入社。現在は仕入れ・バイヤーチームに所属し、ケニアを担当している。</p>	<p>10月、青年海外協力隊に参加。</p> <p>キルギスのイシククリ州にある一村一品組合に所属し、生産者増加を目的とした生産者団体の巡回と、一村一品ショップでのショップマネジメント指導に取り組み。</p>	<p>(特活) ジャバラニール市</p> <p>民による海外協力の会のインターンとなり、外務省主催の「NGOインターン・プログラム」を利用し、ネパールで10カ月研修を受ける。</p>	<p>フェアトレードショップ「アリス・ジュース」の販売員①</p>	<p>浦和実業高校卒業後、アパレル販売員に。</p>	<p>埼玉県出身。</p>

選択の理由

父親が、TV番組の「アニマルプラネット」をよく見ていたことや、好きな映画俳優が環境保護活動に熱心だったことも、フェアトレードに興味を持った理由のひとつ。

選択の理由

キルギスで、大好きな日本茶を淹れて飲んだときにおいしく感じられず、日本の物は日本でこそ一番良い状態でいられるのではないかと感じるようになった。人間もそうではないかと感じ、日本で暮らせる仕事を選ぶ。

輸入販売会社の社員に

→ **協力隊に参加**

アパレルの販売員、フェアトレードショップの店員を経て、青年海外協力隊に参加した福田順子さん。協力隊への参加により、改めて知った大切な人たちの側にいたいという気持ち。また、海外と雑貨への消えぬ憧れから、福田さんは現在、日本にあるアフリカ雑貨輸入販売会社の社員として働いている。

「この基礎だと思っようになりました」
辿り着いたのが、フェアトレードという言葉だ。たまたま、家からほど近いフェアトレードショップが店員を募集しており、転職を決めた。接客してみると、生産地である開発途上国に行ったことがないため、商品を自分の言葉で紹介できないことに気づく。休暇のたびに生産国を訪れ、また、国際協力NGOのインターンとして海外研修にも参加。知識の増加と比例して現場で活動したい思いが募った。協力隊経験者だった同僚の話も聞き、現地で暮らし、活動できる協力隊への応募を決意。合格し、キルギスへの派遣が決まった。

本や映画が好きで夢見がちな子どもだったという福田さんは、米国人映画俳優に憧れ、通訳を目指して英語科のある高校に進学した。しかし、卒業時には自立への思いが強くなり、就職。アパレルの販売員になった。前向きで、人と話すことが好きな福田さんに、接客業は天職で、不足なく、楽しく暮らしていた。この生活でいいと思って過ごす頭の片隅で、このまま人生が終わってしまっとも感じた。「やりたいことって何かな、と考えて浮かんだのが両親でした。父は獣医師としてJICAのプロジェクトにかかわったことがあり、家族同伴の海外勤務もありました。母は手芸が得意で、私の服は手づくり。海外と手仕事、身近な2つのことが、私のやりたいこ

「どんな商品にも必ず魅力があり、それを見つめるのも私の仕事。現地で商品の背景を知り、日本で伝える機会を仕事で与えてもらえたのは幸運でした。学ぶことも多く、人としても成長につながっていると感じています」
何より商品をお客様と話が広がる、そんなやりとりで幸せを感じるという福田さん。家に帰れば大切な人と食卓を共にできる。小さな幸せを積み重ねていくこの生活を、かけがえのないものだと感じている。

大切な人の幸せが、自分の幸せ

キルギス・コミュニティ開発・2015年度2次隊
福田順子さん



キルギスで本当の家族のように接してくれたホストマザーと福田さん

小さな幸せを日常に見つける

「仕事はタイミンクと縁」と福田さんはいう。派遣中、同時期に2人の知人から「あなたにぴったりの仕事」と、有限会社アフリカスクエアの仕事を紹介された。同社は、アフリカの雑貨や食品などを輸入販売しており、本社は福田さんの地元・埼玉県。海外と雑貨にかかわり、家族の側にいられる仕事だった。帰国後、面接を経て入社。現在は、仕入れ・バイヤーチームに所属し、ケニアを担当している。日本では商品の受注と現地への発注、ケニアでは発注品の進捗管理、買い付け、営業などを行う。発注の際、寸法が違えば品質に影響が出る。念押しを重ねながら業務を進める方法は、協力隊時代と変わらない。

「この仕事は、女性たちの幸せにつながっている。活動をとおして大事な友人となったスタッフが幸せであるために、できる限りのことをしたいと思うようになりました」
取り組んだのは販売店の改善。接客や商品のディスプレイ、収支管理の方法などを現地スタッフに伝え、売り上げを明確にするなど目標を持つて働けるようノウハウを伝えた。福田さんの思いは伝わり、スタッフは知識を吸収していき、スタッフにとっても福田さんは大切な友人になっていった。
キルギスの友人を大切に思うほど、日本の家族や友人を思い出した。できればみんなの幸せを願い、側について支え合えればいけれど、自分の抱えられる量は限られている。日本を遠く離れたことで、大切な人の側にいることが、自身の幸せだと思っようになった。

「協力量の経験で、言葉が通じづらいことに慣れていくことに加え、日本人の仕事の感覚と海外の仕事の感覚が違うことを実感しました。それを前提に仕事に取り組みるので、相手に合わせながら仕事を進められます」
同社では年に一度、商品展示会を開催している。そんなとき、自らの言葉で商品を語ることで自分に出会う。
「どんな商品にも必ず魅力があり、それを見つめるのも私の仕事。現地で商品の背景を知り、日本で伝える機会を仕事で与えてもらえたのは幸運でした。学ぶことも多く、人としても成長につながっていると感じています」
何より商品をお客様と話が広がる、そんなやりとりで幸せを感じるという福田さん。家に帰れば大切な人と食卓を共にできる。小さな幸せを積み重ねていくこの生活を、かけがえのないものだと感じている。



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第①回 看護師隊員篇

Cさん(女性)

●現職：地方自治体福祉部門の非常勤職員(精神保健福祉業務担当)

●派遣前のキャリア：看護師(精神科病院/4年間)

●JICA ボランティア：▶看護師・アジア地域・2015年度派遣(退職参加) ▶県保健局に配属され、地域保健の向上支援に従事。

Bさん(女性)

●現職：看護師(急性期病院の混合病棟)

●派遣前のキャリア：看護師(総合病院の混合病棟/6年間)

●JICA ボランティア：▶看護師・大洋州地域・2015年度派遣(退職参加) ▶糖尿病クリニックに配属され、診療サポートや同僚への指導などに従事。

Aさん(女性)

●現職：看護師(小児クリニック)兼 ヨガインストラクター

●派遣前のキャリア：看護師(急性期病院<★>のレディース病棟/5年間)

●JICA ボランティア：▶看護師・アジア地域・2014年度派遣(退職参加) ▶県保健局に配属され、巡回診療の支援などに従事。

* 急性期病院…急性疾患などで緊急・重症な状態にある患者に、入院・手術・検査など高度で専門的な医療を提供する病院。

帰国後の歩み出し

A 私は協力隊時代、現地の人が話す言葉の半分も理解できない状態だったこともあり、「自分には役立てることなどほとんどない」と感じ続けていました。なんとかできることを見つけて取り組みはしたものの、とても「働いている」と言えるようなレベルではありません。そのため、日本の職場に早く復帰し、看護師としてもう一度しっかり働きたいという欲が強かったんですね。そのため、派遣中に現在の職場である小児クリニックにコンタクトを取り、就職の内定をいただいていたんです。

B 日本でしっかり働き、人の役に立ちたくて仕方がなかったという点は、私もまったく同じでした。私は協力隊活動で現地の看護師への指導もしたのですが、それがおもしろかったので、帰国後は日本の看護教育に携わってみたいと思ったんですね。それにはまだ専門知識が足りないもので、大学院に進学する必要がありました。そこで、まずは大学院を持つ大学の附属病院で看護師として働こうと考え、それに当てはまる現在の職場に帰国の2、3カ月前からメールでコンタクトを取りました。派遣中に就職試験の段取りなどを組んでいただくことができたので、帰国してわずか1週間後に受験することができ、その3カ月後から勤務を始めています。

C 私はおふたりと違って派遣中に再就職の準備はしておらず、「いずれ国際協力に携わりたい」という漠然とした思いだけを持って帰国しました。そうして、まずは生活のために派遣の看護師として修学旅行の添乗や高齢者施設での看護など単発の仕事をしたのですが、それらの仕事をとおして、「自分には、国際協力に携わるのに必要な『身体的な看護』の

B 「国際協力の仕事」や「外国人とかかわる仕事」以外にも、協力隊経験はなんらかの形で生かせるかもしれませんよね。私は今、職場で中堅層に入っているので、若い看護師の指導や業務改善なども担当しています。志の高い看護師が集まっている職場なのですが、ボランティア精神が強いあまり、残業をダラダラやっってしまう人も多い。それをどうやって変えていくかが、今の仕事の悩みです。そんなふうにな「看護師のより良い働き方」を考えるようになったのも、協力隊時代に現地の看護師たちのワークライフバランスを目にしたからでした。

A 私は今、クリニックの仕事はフルタイムパートにし、副業として週2、3回、ヨガ教室を開いているんですね。そちらの仕事は、それが苦痛だったのですが、気がつけば、受け身の働き方ばかりでは物足りないと感じるようになっていました。ヨガ教室の仕事はすべて自分で考えて進めるものなので、病院での仕事とのダブルワークは良いバランスだなと感じています。

C 私が今の仕事のなかで協力隊経験の影響を感じるのには、「地域」へのまなざしですね。派遣前は病院でしか働いたことなかったのですが、病院の外の人たちの健康に目を向けることがありませんでした。一方、私の協力隊活動は地域看護でしたので、そこで初めて、広く「地域」の人々の健康を考える感覚が身についた気がします。今の仕事は地方自治体の業務で

技術がない」と感じたんですね。前職は、「心理的な看護」がメインとなる精神科病院の看護師でした。そこで、身体的な看護の技術を身につけたいと考え、いったん総合病院に就職します。ところが、面接試験の際には「新人同様に扱う」と言っていたのですが、配属された外科病棟の看護師長は即戦力を期待していたようで、「いったい今ままでどんな所で働いていたの!」と責められてしまいました。そのようなこともあり、やはり今から新たな専門分野で看護師を務めるのは難しいと考え、地方自治体の福祉部門に転職して、精神科病院の長期入院者の退院を促すという、前職の経験が生きる仕事に就いています。

帰国後の苦労&失敗

A 辞める気持ち、私はわかります。看護師隊員の大半は派遣前のキャリアがせいぜい5年程度でしょうから、看護師としてもまだベテランというわけではない。まして、前職で経験していない科で働くとなると、「新人」に近い地点からのスタートになってしまう。私は協力隊活動が子どもを対象にしたものだったので、派遣前に経験していなかった小児科の看護職に就くことにしたのですが、やはり一から勉強しなければなりません。言葉が通じる環境で働ける点は「幸せだなあ」と感じますが、逆に言葉の微妙なニュアンスもわかってしまうため、上司などのちょっとした注意や何気ない発言のひとつひとつが心に突き刺さる。2年の間に打たれ弱くなったものもあるかもしれません。そのため、現在の職場に就職してから3カ月間くらいは、新人看護師時代のようにトイレで泣いたりすることもありました。た

すので、当然、そうした感覚は重要ですが、病院勤務の看護師であっても、「地域」に目を向ける力は重要ではないでしょうか。

A クリニックなどは特にそれが当てはまると思います。「治療」だけでなく、「予防」のためにも地域の多くの方が訪れる場所ですので、患者さんたちとの関係は、「看護師と患者」というより、「看護師と住民」に近いからです。

ライフプラン

B 私は近々結婚するかもしれないのですが、そうすると、仕事を続けることや大学院に進学することについても、夫に相談しなければならなくなるので、ライフプランの立て方もだいぶ変わってくるだろうと思っています。おふたりは、何歳まで働くことを想定してライフプランを考えるようにしていますか?

C 私は、先々のライフプランについては「こうしよう」と決めすぎず、流れに乗りながら生きていくのが良いのかなと思っています。というのも、私は帰国後に結婚したので、流産してしまったことがあるんですね。そのときに、「女性は妊娠すると、ライフプランに対する考え方が大きく変わるんだな」と実感したからです。

A 私も「なるようになる」と考えるようにしており、「あと10年は働き、その後は派遣国に戻ってゆっくり過ごすのもいいかな」くらいのイメージです。というのも、そもそも協力隊経験自体が生き方についての考えを変えるものだったからです。だからこそ、派遣中の方々にも、あまり先のことは考えすぎず、むしろ自分の変化を楽しみしながら、活動に全力で取り組んでいただきたいと思います。

2年間の経験は生きている?

B 私も派遣中、Cさんのように国際協力の道に進もうと考えたことがありました。派遣国でJICA専門家として働いていらっしゃる方にもたくさん話を伺ったのですが、「留学し、公衆衛生の修士号を取って」といったところまで自分がんばれないなと思い、諦めました。そうして、せめて日本にいる外国人の方の看護くらいには携わりたいと思い、「外国人の患者が多い」という点も考慮して選んだのが今の職場でした。Cさんは今でも国際協力の道はあきらめていない?

C まだ興味はあるのですが、自分に務まる仕事ではないだろうと感じています。やはり、これまで経験してきた精神科の看護を極めるのが、私の進むべき道なのかなと。現在は、その専門性を深めるために大学院に進学するこ



知ったク情報



写真を楽しむ①

ナビゲーター = 森 佑一さん
(ヨルダン・環境教育・2014年度3次隊、フォトジャーナリスト)

人の写真を撮る上で大切な3つのポイント

派遣国で暮らすようになると、写真を撮る機会も多くなると思います。せっかく撮るなら、思い出や人に伝えるために良いものを残したいはず。そこで、撮影についてちょっとしたコツをお伝えできればと思います。今回は人の写真を撮るポイントをお伝えします。

①被写体とコミュニケーションをとって仲良くなるよう

人を撮る場合、写真を撮ることよりも、被写体となる人とのコミュニケーションが大切です。お互いが慣れていない内は緊張して硬くなってしまいがちで、なかなか相手の良い表情を引き出すのが難しいです。もしかしら写真を撮られるのが嫌いな人で、後にトラブルに発展することもあるかもしれません。お互いに気持ちよく写真を撮影するために、時間が許す限り、友達になるくらいの気持ちで、しっかりコミュニケーションをとるように心がけましょう。

②被写体に当たる光を意識しよう

写真撮影に欠かせないのが光。被写体への光の当たり方で印象がガラッと変わります。光の当たり方は、主に3つ。

- 順光…被写体の正面から当たる光。被写体を明るくはっきり写せるが、眩しくて目を細めて険しい顔になることも。
- 逆光…被写体の後ろ側から当たる光。自然な表情になるが、被写体と背景の明暗差が強くなるのでその調整が難しい。
- 斜光…斜めから当たる光。趣のある雰囲気になるが、顔の一部に影ができてしまう。

そこでおすすめなのが日陰(曇り)での撮影。被写体に強い光が直接当たらないので、柔らかい自然な感じの写真になります。

③カメラをややズームして撮影しよう

多くのカメラにはズームレンズが付いています。ズームしなければ広範囲を写せ、ズームすれば遠くのを大きく写せます。

撮影時に気をつけて欲しいのが、レンズ特有の「圧縮効果」。ズームせずに撮影すると近くの方が大きく、遠くの方が小さく写り、逆に目一杯ズームすると手前のものと奥のものが近づいたように写ります。人を撮るときに、全くズームせず被写体を近くで撮影すると顔や体が歪んで写ってしまい、逆にズームしすぎると奥行きのないのっぺりとした感じになってしまいます。見た目に近い自然な奥行き感になるように、カメラのズームを調整して撮影してみましょう。 C

現地の産品でクッキー

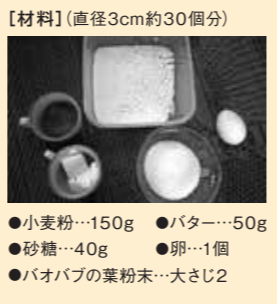
ナビゲーター = 佐藤麻衣さん
(セネガル・野菜栽培・2017年度1次隊)

バオバブクッキーの作り方

派遣国で生活をしていると、現地のお菓子といえば、油を大量に使った甘いドーナツやカロリーの高そうなケーキが定番。また、炭水化物ばかりの料理で栄養の偏りや野菜不足を感じることもあるのではないのでしょうか。私の任地には栄養価の高いバオバブの葉があるのですが、食べ方のレパートリーが少なかったため、バオバブの葉を使って栄養を意識したクッキーを手づくりしてみました。オープンがなくてもフライパンで焼けるので試してみてください。 C



③④を約30等分する。生地を白玉の大きさほどに丸めたら、上から押し潰して厚さ1センチくらいにする。



【材料】(直径3cm約30個分)
●小麦粉…150g ●バター…50g
●砂糖…40g ●卵…1個
●バオバブの葉粉末…大さじ2



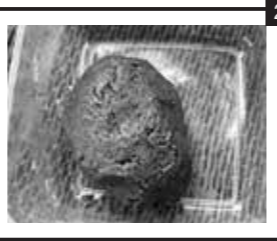
④フライパンに生地を並べ、弱火で約5分焼く。いい香りがしてきたら裏返し、約5分火を通す。少し押し、固くなっていたら中まで焼けているので取り出す。



①あらかじめバターは常温に戻しておく。材料をボウルなどに入れて混ぜる。現地にある豆を小豆のように放いで生地に少し入れると、和風クッキーに!



⑤完成。火があればどこでもつくれるので、現地の子どもたちや女性グループと一緒につくってみてもいいと思います。

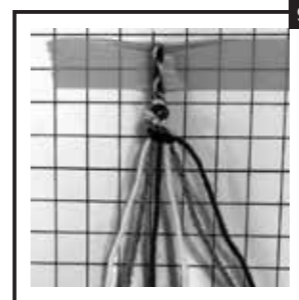


②ひとかたまりになるようにまとめる。バオバブの葉の粉末や豆以外にも、現地にあるナッツや栄養のある食材を使ってみてください。

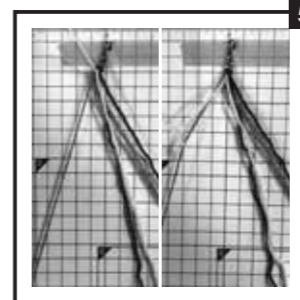
活動に役立つアイデア



現地の産品でクッキー



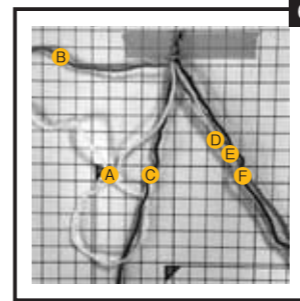
⑨⑩で、⑤～⑦と⑧⑨を巻き結ぶ。これで、3列が完成。



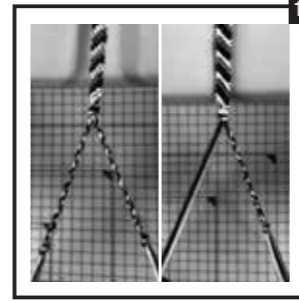
⑤⑥を下側にひっぱったまま、④を上に引いて、ギュッと結ぶ。④～⑥を再度行い、④を⑤に2回巻き結ぶ。



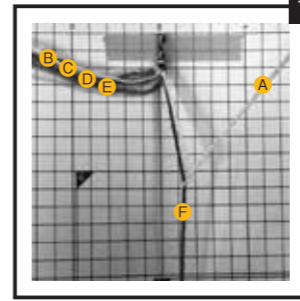
⑩⑪で⑥⑦と⑧～⑩を、⑤で⑦と⑧～⑩を、⑥で⑧～⑩を巻き結ぶと、1周し、6列が完成。あとは腕の周りの長さになるまで、同じことを繰り返す。



⑥次に④を⑥に巻いて結ぶ。2回、巻き結ぶ。



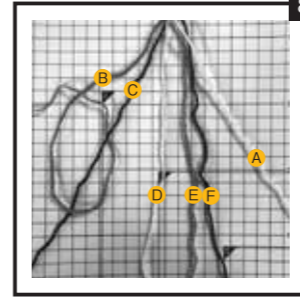
⑪巻き結びが終わったら、6本をまとめて結ぶ。3本ずつに分けて、2つの三つ編みをつくり、5センチほど編んで、結べば完成。2つに分かれたヒモを、①の輪っかの部分に通して腕などに結ぶ。



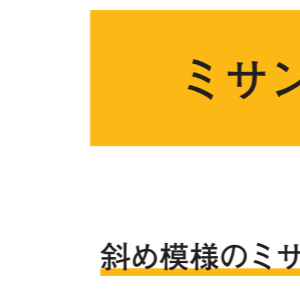
⑦④を⑥まで同じように巻き結んだら、1列目が終了。④が右端になる。



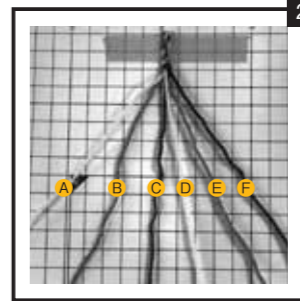
⑫完成したミサンガ。出来上がりの幅を広げたいときは、1本につき、20センチ程長くする。右巻きと左巻きを組み合わせると、V字模様やダイヤ模様もつくれます。



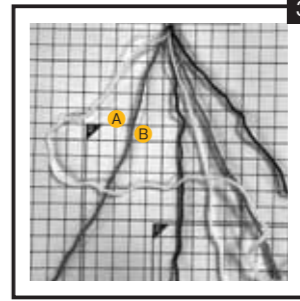
⑧⑥で④～⑦、④を巻き結ぶ。



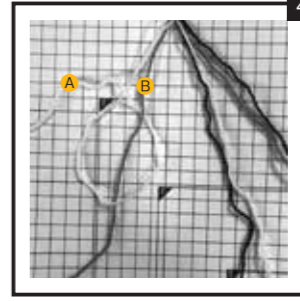
②輪の部分を粘着テープでしっかり固定。6本の糸(A～F)のうち、左端にある糸を、残りの5本にそれぞれ巻き結んで、1列を作成する。最初は④を⑤～⑥に巻き結ぶ。



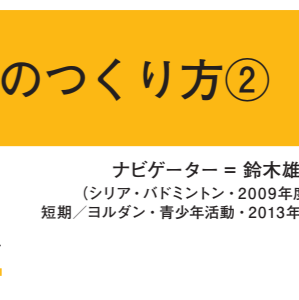
③④を⑥の上に乗せる。



④⑥の下に、④をくぐらせる。

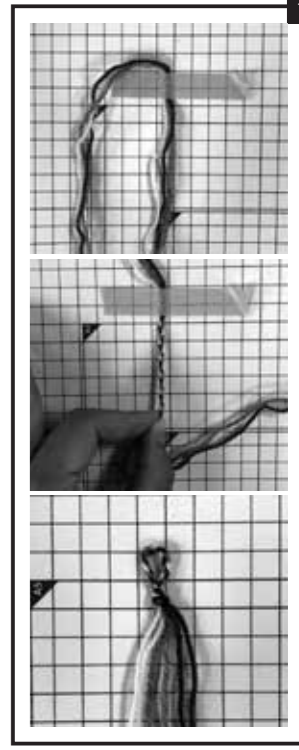


⑤③本の糸を半分に折り、粘着テープで折り目付近をとめる。5センチほど三つ編みをしてから輪っかをつくり、輪っかの根元を結ぶ。



①3本の糸を半分に折り、粘着テープで折り目付近をとめる。5センチほど三つ編みをしてから輪っかをつくり、輪っかの根元を結ぶ。

- 【用意するもの】
- 毛糸・皮ヒモ・刺繍糸など…約1メートルを6本(2メートルを3本)。色はお好みで。
 - 粘着テープ
 - はさみ
 - 定規



⑥完成したミサンガ。出来上がりの幅を広げたいときは、1本につき、20センチ程長くする。右巻きと左巻きを組み合わせると、V字模様やダイヤ模様もつくれます。

活動に役立つアイデア



ミサンガの作り方②

ナビゲーター = 鈴木雄太さん
(シリア・バドミントン・2009年度1次隊、短期/ヨルダン・青少年活動・2013年度派遣)

斜め模様のミサンガ

活動中に、情操教育の一環として子どもたちと一緒につくったミサンガを紹介します。前号の導入編より工程が少し難しく、作成に時間がかかりますが、糸を国旗の色にするなど、好きな組み合わせにすると、個性あるミサンガをつくることができます。 C

安全対策コラム

犯罪や事件に巻き込まれないよう
安全対策を日々心がけましょう



バッグ類をたすき掛けにするなど 首からかけることの危険性について

バッグを「たすき掛け(斜め掛け)」にするなど、首からかけているところを、バイクなどで近づいてきた犯人にひたたくられるという事案が頻発しています。これらの事案では、引きずられて怪我を負う恐れや、打ち所が悪ければ重傷となる恐れもあります。

対策

防犯意識からたすき掛けにしている場合、たすき掛けには上記のような危険があるということを改めて認識してください。バッグを持ち歩くときには、下記の3点に留意しましょう。

- **バッグ類は手に提げて持ち歩く(車が通る側には持たない)**
単車による引ったくりは、2人乗りの後部座席の犯人が、走り抜ける際に引ったくりを試みる事が多い。手にバッグを提げること、バッグは地面に近い位置にあることになり、単車に座っている犯人からは取りづらくなる。

- **バッグ類のヒモは短くし、衣類で隠して見えづらくする**
仮に、たすき掛けをしてバッグを携帯する必要があるときには、バッグをたすき掛けにしてから、衣類を羽織るとよい。犯人が引ったくろうとしても、つかむ対象が見えにくく、また取りづらくなるため、有効である。
- **首から下げる場合、引っ張られたとき、はずれる物に**
携帯電話などにストラップをつけて首から下げる場合は、強く引っ張られた際に、首からはずれるようにしておくことよい。

健康管理員より **健康管理コラム**

心身共に健康に2年間を過ごすために

動物を見たら 咬むと思え!

皆さん、犬や猫を触ろうとしたとき、咬まれたり引っ掻かれたりしたことはありませんか?

日本では狂犬病予防法があり、犬を飼う場合は、飼い主は年に1回ワクチンを接種させる必要があります。日本でのペットのワクチン接種はごく当たり前のことでも、派遣国ではそのような状況にありません。現地の人で飼われているペットは、ワクチン接種がされていないことがほとんどなので、不用意に近づいたり撫でたりしないようにしましょう。自分の身を守りペットを守るためにも、犬や猫を飼う場合は、ワクチンの接種を強くお勧めします。

狂犬病は犬や猫からだけでなく、哺乳類から感染する病気です。野生の猿や家畜、コウモリも哺乳類で狂犬病に罹患することがあります。

【咬まれたらどうする?】

狂犬病は有効な治療が未だに確立されておらず、発症したらほぼ死に至ります。哺乳類から咬まれる、引っ掻かれるなどした場合は、以下の対策を。

- ① **流水や石けんを利用して十分傷を洗いましょう。**
- ② **24時間以内に受診をしましょう。**

自身のワクチン接種歴により、多くは咬まれた後のワクチン接種が必要になります。接種回数を医師に確認しましょう。咬まれた後の対処はもちろんのこと、咬まれないようにする皆さんの予防への心がけが大切です。不慣れた土地や初めての自宅に訪問する場合や、野良犬の徘徊が増える時間帯である夜間は、特に注意しましょう。

かわいいからとむやみに手を出してはいけません! そして、油断大敵! 背後にも気をつけましょう。

農業分野の応募者拡大を期待。 国際農業者交流協会との覚書を更新

9月7日、公益社団法人国際農業者交流協会(JAEC)とJICAとの間で、2014年に署名された、農業分野の青年海外協力隊応募者の増加に向けて協力する旨の覚書が更新され、その署名式が東京・千代田区のJICA本部で開催されました。

JAECは海外農業研修事業において、毎年米国や欧州などへ日本の若者を農業研修生として派遣し、現地で農業研修を行っています。その研修修生の中で人物・技術ともに優れた人を協力隊員としてJAECから推薦いただいています。開発途上国からの派遣要請が多い農業分野において、さらなる応募者の拡大を期待し、推薦対象者の範囲を拡大する形で覚書を更新しました。



覚書式で握手を交わす、JAEC会長の野中和雄氏(右)とJICA青年海外協力隊事務局長の山本美香(左)

グローバルフェスタJAPAN2018

9月29日、東京・江東区のお台場センタープロムナードで、日本最大級の国際協カイベントグローバルフェスタJAPANが開催され、4万3888人が来場しました。このイベントで青年海外協力隊事務局は、JICAボランティアを目指す人が相談・質問できる「JICAfe」を出展し、JICAボランティア経験者やJICA職員が、来場者ひとりひとりの「知りたい」「聞きたい」に答えました。

派遣者数と帰国者数

2018年度2次隊の派遣者数、2016年度2次隊の帰国者数はそれぞれ次の通りです。

2018年度2次隊派遣者数	
青年海外協力隊	278人(54カ国)
シニア海外ボランティア	50人(23カ国)
2016年度2次隊帰国者数(2018年9、10月帰国/予定)	
青年海外協力隊	239人(48カ国)
シニア海外ボランティア	43人(27カ国)

天皇皇后両陛下が 帰国したJICAボランティアとご懇談

9月26日、天皇皇后両陛下が、約2年間の活動を終えて帰国した青年海外協力隊員、日系社会青年ボランティアの代表とご懇談されました。

今回、両陛下とご懇談したのは、大西海斗さん(ウズベキスタン・理学療法士・2015年度3次隊)、沖田咲さん(旧姓・生山/カンボジア・水泳・2015年度3次隊)、松村剛志さん(サモア・コンピュータ技術・2015年度4次隊)、伊波さと子さん(ポリビア・小学校教育・2016年度1次隊)、谷口稜子さん(チリ・コミュニティ開発・2016年度1次隊)、西口記子さん(ベナン・小学校教育・2016年度1次隊)、安藤洋之さん(ケニア・青少年活動・2016年度1次隊)、長尾直洋さん(日系JV/ブラジル・社会学・文化人類学・2016年度派遣)の8人です。

JICAボランティアへの 外務大臣感謝状授与式を開催

9月27日、帰国したJICAボランティアへの外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。授与式には、帰国した青年海外協力隊員とシニア海外ボランティア、日系社会青年海外協力隊ボランティア、日系社会シニア・ボランティア、75人が出席し、堀井 巖外務大臣政務官から感謝状を授与されました。来賓として「日本の国際協力 特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」(JICA議連)に所属する三原朝彦衆議院議員、馳 浩衆議院議員、大野元裕参議院議員、新妻秀規参議院議員のほか、北村誠吾参議院議員、富岡 勉衆議院議員、武井 俊輔衆議院議員、山田俊男参議院議員、大島九州男参議院議員、井上一徳衆議院議員が参加され、北岡伸一JICA理事長も参加しました。

授与式では、堀井外務大臣政務官に労いと激励の言葉をいただいたのち、ボランティア代表として、松尾雄大さん(セネガル・小学校教育・2016年度2次隊)があいさつ。授与式に続いて行われた懇親会では、鈴木瞳さん(ガーナ・保健師・2016年度2次隊)、生田卓也さん(ベナン・小学校教育・2016年度2次隊)が、活動を報告しました。

「JICA理事長表彰」表彰式を開催

JICAでは、国際協力事業を通じて開発途上国の人材育成や社会発展に多大な貢献をされた個人・団体に対し、その功績を讃え、「JICA理事長表彰」を授与しています。14回目の今年は、49個人・団体が表彰され、その表彰式が10月1日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで開催されました。元海上保安庁長官の中島敏さん(バングラデシュ・航海術・1982年度3次隊)や、JICAボランティア事業を支援している一般社団法人協力隊を育てる会の副会長で、公益社団法人日本青年会議所事務局アドバイザーを務める水野 秀一さんなどが表彰されました。

つぶやき

お題 ▶ 饞別



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

サプライズ?

「サプライズで欲しいものを教えて!」と聞かれたのは配属先での最終報告会の2週間前。何のことかわからず、「民族衣装のプレスレット」と。最終報告会后、苦楽を共にした同僚から「サプライズだよ。日本に派遣国を持って帰ってね」と、みんなの前で例の腕輪と民族衣装一式を頂いた。サプライズの意味って何だろうと考えると、ふふふと笑ってしまう。帰国後も身に着けるたびに派遣国を思い出せる最高のプレゼント。

ペンネーム: バオバブの下を流れる灌漑用水さん(男性) 協力隊経験者(アフリカ・コミュニティ開発・2016年度派遣)

★ 民族衣装コレクション

同僚たちがお金を出し合って用意してくれた民族衣装。着てみると「似合ってる～いい色ね!」「これであなたもこの国の人ね!」と嬉しそうな同僚たち。いつも可愛いがってくれていたけれど、改めて素敵な人たちに囲まれていたんだと幸せな気持ちに。大家さんや友人たちにもいただき、トランクいっぱいにお饞別と思い出をつめて帰国しました。日本ではなかなか出番のない民族衣装たち。披露する機会、早くこないかな～♡

ペンネーム: 任国が恋しいさん(女性)
協力隊経験者(中東・助産師・2016年度派遣)

★★ 次から次へと

配属病院での活動最終日にやったミーティングの終わり、病院や配属部署から、それぞれ送別の品をもらい、それだけでもすでに3箱。でも、それだけじゃ終わらず、〇〇病棟から、〇△病棟から、誰々から、誰々から……と、次から次へと思い出深い面々が出てくる、出てくる!「泣いちゃダメ」って何度も言われたけど、受け取ったモノが多すぎて、目から溢れちゃうものがあったよね。

ペンネーム: ポパーさん(女性)
協力隊経験者(アジア・看護師・2016年度派遣)

★★★ 感謝のきもち

活動最終日、リハビリを担当した患者さんたちが、饞別として私の名前を入れた伝統的な織物をそれぞれプレゼントしてくれた。しかし、もらったいくつかのプレゼントをよーく見ると、私の名前のスペルが少し違う……。たとえ間違っても、その気持ちだけで十分でした。こちらこそありがとう。

ペンネーム: パンチさん(男性)
協力隊経験者(アジア・作業療法士・2016年度派遣)

募集中のお題

「初対面」「ゴリ押し」「日本食」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 文字数の多い志望動機はどう書く？

提出する応募書類のひとつで、志望動機についてA4用紙1枚分の記載を求められました。何をどのように書けば良いのでしょうか？

A. 役立つスキル・経験について、 具体的な事例を挙げ、明確に伝える。

まず、応募先によって志望動機の内容は変更する必要があります。その上で以下3点に留意して記載してみましょう。

- 最も伝えるべきことは、応募先にとって自分の経験に基づくどのような知識やスキル、専門性などが役に立つかということ。それらを明確に記すこと。
- わかりやすい内容にまとめること。結論を最初に示す、主語・述語を明確にする、一文を短くする、曖昧な表現を避けるなど、相手にとってわかりやすいような文章を心掛ける。
- 自分の経験をただつらつらと書いて、体験談レポートのようにまとめるのはNG！

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役は履歴書や応募書類のチェックも行っていますので、ぜひご相談ください。



かなやまこういち

金山光一さん(進路相談カウンセラー)

担当地域：東京・埼玉・千葉・群馬・茨城・栃木

✉ Kanayama-Koichi@jica.go.jp

● 経歴：旅行会社、相模原市小学校教諭、中学校教諭、教育委員会、小学校校長を経て、2018年7月より現職。現在は、都留文科大学特任教授、早稲田大学非常勤講師、LCA国際小学校顧問も務めており、北欧やオーストラリア、キルギス、タンザニアの教育研究も行っている。

私は長い教職の間、日本の子どもから「子どもらしさ」が失われてきているような気がしていました。しかし、私が教育研究で訪れたタンザニアやキルギスの学校での子どもの目は輝いていて、教育の原点を見つめなおすことができました。そして、そんな中で日々、格闘している隊員の情熱と努力は私にとっても大きな刺激でした。私はJICAボランティアの皆様の貴重な経験を日本の子どもに伝えてもらいたいと思ってカウンセラーを希望しました。皆さんは日本、世界を変えるエネルギーを持っています。人生、児童生徒指導、保護者対応、授業に悩んだら何でも相談に来てください。ともに世界の教育を考えましょう。

いしざわしづ

石澤志津さん(進路相談カウンセラー)

担当地域：東京・埼玉・千葉・群馬・茨城・栃木

✉ Ishizawa-Shizu@jica.go.jp



活動中は、達成感や充足感を得ることもあれば、フラストレーションを感じたり挫折感を味わったりすることもあるでしょう。振り返れば、どんな経験も人生の糧となります。ある程度辛いことも含めて、ときどきは自分の過去・歩んできた道を冷静に振り返る癖をつけてみてください。仕事における価値観の形成には、成功体験以上に失敗や挫折が大きく関与するものです。JICAボランティアに参加したこと自体が、長い人生の中の素敵な1コマであり、その後のさまざまなシーンに繋がっていくはずですよ。迷ったり揺らいだりすることもあると思いますが、それも含めて今を楽しみましょう。「こんなこと相談しても良いのかな……」とためらわず、どんなことでも相談してください。

● 経歴：外資系企業で18年間マーケティングの仕事に携わった後、公共美術館の企画・広報担当責任者として公務員となり行政の世界へ。プロのマーケッターとしてのサラリーマン生活から一変し、2015年「キャリアデザインラボ」を立ち上げて企業のキャリアコンサルティングを行う。2018年7月より現職。

クロスロード

平成30年11月号 [第54巻第11号 通巻642号]
発行日 平成30年11月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
TEL：03-5226-9814 FAX：03-5226-6379

落丁・乱丁の場合はお取り替えますので、発行元までご連絡ください。

『クロスロード』ウェブ版は以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>

※ウェブ版の公開は11月中旬を予定しております。



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデア也大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



以下のようなアイデア・
投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。



CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



仕事帰りに泣いていました。

とうかいりん ゆ き
文=東海林由貴さん

- ▶ポリビア
- ▶エアロピクス
- ▶2016年度2次隊

PROFILE

1989年生まれ。山形県出身。神奈川県フィットネス企業で3年3カ月間の勤務を経て、2016年10月、協力隊員としてポリビアに赴任。18年10月に帰国予定。

活動概要

ラバス市役所スポーツ振興部に配属され、主に以下の活動に従事。

- ラバス市内の7カ所を回り、健康増進のため、市民に対しエアロピクスやヨガを指導
- スポーツ振興部開催のイベントへの協力

配属されてすぐに、私はあるエアロピクスクラスのインストラクターをいきなりひとりで任されました。しかし、それまでポリビア人インストラクターが教えていたそのクラスの反応はいまいち。さらに、前のインストラクターをとっても慕っていた生徒たちは、新しく来た私の文句まで言っている様子でした。今まで通っていたクラスにいきなりアジア人がきて、今までと違う方法で教え出したら、確かにそうなるのもわかる気はしますが、なんとか受け入れてもらおうと、私は一生懸命教えました。しかし、いつも空回りしてなかなか盛り上がりならず、自分ばかり疲れてしまい、それが悔しくて悔しくて、帰り道ではいつも泣いていました。

そんななか、私はクラスに取り入れるため、現地の人が好きで音楽のレゲトンやメレンゲ、クンビア、そしてポリビアのフォルクローレ(民俗音楽)を聞きあさることにしました。それまで私は、「日本人なのだから、日本の音楽を伝えたい」と考えていたのですが、あれこれ悩んでばかりいるのではなく、まずは行動だと考え、自分のスタイルを変えることにしたのでした。

ある日、フォルクローレをクラスに取り入れてみたところ、多くの参加者が喜んでくれました。そして、大拍手。いつのまにか文句を言う人もいなくなりました。「思い付いたら、意味を考える前にまず行動することが大事」ということを実感しました。

私が配属されたのは新規の場所で、初めは何をすれば良いかわからず、荒野に放たれた気分でした。し

かし少しずつ自分のペースがつかめてきて、やれることをやっていたら、それが配属先での自分の役目になっていました。任期が終わってしまうと、もう先住民のおばさんたちと手取り足取りヨガを行うことも、娘のようにかわいがってくれたノリノリのおばちゃんたちと踊ることも、冗談ばかり言う配属先の人たちとしゃべることもなくなってしまいます。今ではそれが本当に寂しく感じます。私はボランティアの経験を通して、「その時は大変に思えても、乗り越えた後は大きな自信につながる」と学びました。

YELL!!

苦労を経験するほど、糧になる!

ひとりひとり置かれる状況は違いますが、どんな困難にしろ、苦労が多いほど、自分の協力隊生活の価値が上がっているのだと信じて、ぜひ前向きに考えて頑張ってください。



フォルクローレを踊って距離が縮まったクラスの生徒たち。サプライズで誕生日を祝ってもらったときの様子



今月号の表紙
from ザンビア



くりはらじゅんこ
撮影=栗原純子さん

(SV/ザンビア・公衆衛生・2016年度4次隊)

私はカプエ郡保健局で公衆衛生分野の活動をしています。写真は、「Child Health Week」の際に、栄養失調をスクリーニングするため、コミュニティボランティアさんが子どもの上腕を計測している様子です。ザンビアの保健行政では地域のボランティアさんの活動が欠かせず、ヘルスセンターにおける日々の健診業務の補助、アウトリーチ事業や自宅訪問までさまざまな活動を担ってくれています。私は彼らの支援として、チテングという伝統布を使った小物づくりによる収入向上活動にも取り組んでいます。